

求道

第九卷
第九號



求道第九卷第參號目次

求道

◎真心徹到

講話

◎明了堅固究竟願

近角常觀

「無碍の意義」

告白

◎十年の同情者を失ひて永劫の

同情者を得たり

井口乘海

雜錄

◎至心廻向の意義

近角常觀

毎日曜午前九時

求道學舍

(木郷區森川町一番地)

毎土曜午後二時

第二求道會

(九段坂佛教俱樂部)

毎月二日午後七時

第三求道會

(日本橋區淺草町説教所)

求道

第九卷
第參號

真心徹到

近時思想上の問題として、徹底する、徹底せぬといふ言語が多く用ゐらるゝ、これは實際問題の解決に於て著しく其味を了解することが出来るからである、しからは如何なる思想が徹底して居るや否やと質すに至りては、水際立ちて之を明示することが困難である、唯人々が其譯を明らかにせずして、互に默契冥知する所あるが如くである、全體徹底といふ文字が禪的である、従て唯何んとなく心の調子を意味することになつてある、之を俗語に、求めて頗る適切なる語を見出した、即ち「煮え切らぬ」といふ様な意味である。然らば其煮え切る、煮え切らぬといふは如何なる事かと問へば一向取止めもないことになつて仕舞ふ、されば此問題は信仰上肝要であるや否やといふに恐くは眞宗の眞宗たる點はたしかに此徹底したる點に存するのである、然らば他力に於て徹底したる味は如何、其徹底する否とは如何なる點に存するか、其徹底す

る所以は何故なるか、等の問題を信仰上水際立ちて明示することを得たならば、たしかに時代思潮に對する劃切なる鍵を見出すことが出来るのである。

他力に於て徹底するとは罪惡の自覺が如何にも惡しさが思ひ切れて、救濟の自覺が如何にも中心充滿することが出来た有様である、所謂機法二種の深信が徹底したる告白である、他人の事ではない、自身の事である、考てた問題ではない、現に是れ罪惡生死の凡夫である、過去を顧みれば曠劫已來常没常流轉である、未來を考へても出離の縁あることなし、實に一善も一行も取るべき點なく、如何なる罪惡も、如何なる煩惱も具足せざることなしである、實に長々悪くありました現に悪い頂上であり、永劫悪いことの止む奴ではない、難有い哉、慶しき哉、かくの如き私一人の爲に御心を傷まし、御身を惱まし奉りしことの勿體なや、大悲の親は一々私の病、私の苦、私の罪惡を知ろしめして、虚假不實の隅々まで残る限なく照見したまひ、よくよく御見捨てなく、哀愍攝受したまひて、御遣る瀧なき大悲大願の御思召を以て、飽迄清淨眞實の御苦勞を經去り經來りて遂に正覺を成じたまひて、今日今時まで待ち兼ねたまふ御親心、大悲招喚の御親切、實に

親様御一人で御座ります、嗚呼此親様なかりせば悪さの分かる奴ではない、永劫助かる奴ではない、しかるに幸に此本願に遇ひたてまつり、此親の真心が徹到して下さつた、嗚呼長々悪くありました、今日限りあやまりはてましたよくも今日迄御見捨てもなく、御目だるくも思召さず御手下されしことの勿體なや、今日初めて大悲大願の御思召を承りて、生死流轉の無明長夜に迷へる私か、盡十方無碍光の眞實の親心を頂き一念歸命の夜が明けたといふは如何にも有り難いや、勿體なや、實に値ひ難くして、今遇ふことを得たり、聞き難くして今聞くことを得たり、と聖人の御喜びなされし儘が直に是れ現今の我身の慶なりけり、和讃に曰、

釋迦彌陀は慈悲の父母、種種に善巧方便し、

われらが無上の信心を、發起せしめたまひけり。

真心徹到するひとは、金剛心なりければ、

三品の懺悔するひと、ひとしと宗師はのべたまふ。

真心徹到、真心徹到、實にこれ他力の徹底したる味である、

悪いけれども助けて下さる、助けて下さるけれども悪いことが止まぬ、是實に不徹底なる信仰である、夫故御助けと頂けど悪るさが氣にかゝる、御慈悲に疑はなけれども、如何にも

執心不牢と仰せらるゝも是である、或人 真心徹到されたときに嗚呼長々の間、權假に止りて居つたと申されたも實に此状態を懺悔せられた言である。

然らば如何にして此徹底したる状態に入るか換言せば如何にして真心徹到するかといふが今將に言はんと欲する點である、一例を取らん親が我子の悪しきを見て遣る瀬なく思ふて色々教訓したる所、佛然として色を作して立ち去つた、其氣色の唯ならざるを見て親が追尾して行きた所、將に水に投ぜんとするのであつた、親は驚きて之を止めた、其止める手を振りはなして今や水に投ぜんとするのである、親は無理に引き止めて、我が悪るかつた、歸て呉れと言ふた、此時子供は泣きながら親に引かれて歸つたといふ説話がある、如何にも親のやるせなき親心をあらはせるも泣きながら歸りたのては未だ煮え切らぬ、親が是非歸て呉れ、汝が歸らぬならば我も獨りは歸らぬ、どうかかく迄思ふ親の心を察しく呉れと涙ながらに申されたる時子供は思はず知らず頭を垂れ、涙を流し、嗚呼悪るかつた、許して下さい、かく迄御心配かけしことの勿體なやと五臟六腑に浸みわたるてあやまりはてた一念が實に真心徹到である、廻心懺悔である、或人が申された、今

我身の罪の深きが案じられる、是皆不徹底の状態である、全體悪いけれどもとか、助けて下さるけれどもといふ言を用ゐるのが所謂煮え切らない、我身の悪るさを御助けて打消さんとし、又御助けを我身の悪るさを打消さるゝのは可かぬ、悪いものは悪い、悪るかつた、よくも悪るう御座りますと悪るさを懺悔するに一點の未練はない、我身は現にこれ罪惡生死の凡夫で御座ります、長々悪るう御座りました、また致方なき奴で御座ります、是が深信する有様である、或人が入信の一念號泣して今日限り親様一人て御座りますといふた、是實に深信の有様である、徹底した有様である、所請決定した有様である、近時動もすれば信後妄念の止まぬといふときに若存若亡といふ言語を用ゐる惡傾向がある、若存若亡といふは所謂煮え切らない状態である、一たび真心徹到したるときは決して若存若亡ではない、中心より廻心懺悔して徹底したる有様は金剛不壞の眞信である、三品の懺悔する人と等しと宣ふが實に此點である、此一念歸命の味が分からぬゆへに若存若亡といふ言を用ゐるのである。近時動もすれば信後妄念のつもりて此言を用ゐるなれど忌憚なく言へば信前不徹底の状態にあるのである、三不と戒めらるゝも是である、

迄は少し暖きとあらば熱いと言ひ、少しく嬉しいと大に天に踊り地に躍るやうに申した、實に大悲の親様の御苦勞を知らして貰ふたれば熱いも熱いも頭から煮え湯を被らせられた心地である、悪るかつた、悪るかつた、實に焼火箸を胸に刺された心地である、嬉しいも嬉しいも實に踴躍歡喜である、勿論常に其状態が續かねど一たび熱湯を被りたる暑さは忘るゝとは出来ぬ、往生の定るしるしには慶喜の心起るなり、慶喜の心起るしるしには佛恩報ずる思あり、信仰の得否を他人が印可するといふことは決してない、しかれども一念慶喜するひとは往生かならずさだまりぬ、自から佛のかたより治定せしめたまふ、愚禿鈔に慶喜といふは慶の言は印可之言也、獲得之言也、樂言、悦喜之言也、歡喜踴躍也と仰せられたは、たしかに此決定したる有様である、真心徹到したる有様である、併ながら返へすゝも自分さめこみの決定は不可である、我ばかりといふ獨覺心になりてはならぬ、得た得ぬの沙汰ではない、大悲の親心の遣る瀬なき御慈悲が忘れられぬのが真心徹到である。私は佛に抵抗して居るけれども、佛は私を見捨て、下さらぬといふが如きは如何にも我身の悪るさが分かりたやうなれど佛に抵抗して居るけれども懺悔が起らぬ、嗚呼今

日、まで抵抗して居りたこと、勿體なや其抵抗するのが可愛想
じやとの親心は如何な罪惡の我なれと骨髓に徹入して無限の
大悲識心に攪入した、今日まで大悲に背きしことの勿體なや
南無阿彌陀佛、實にあやまりはてた辨圓の心である、無根信
を得たる阿闍世王の胸中である。

最後に至りて我等は此親様の親心を能く聞かして貰は
ねばならぬ、是實に聞其名號である、是眞に選擇願心である、
而して此願心が難有い、眞宗の眞宗たるところは此願心ばか
りである、信は願より生ずれば念佛成佛自然なり、此願が難有
い、五劫思惟の御苦勞は佛が無駄なことはなさぬ、私が惡
いばかりに御苦勞下されたのである、彌陀の五劫思惟の御苦
勞をよく案ずればひとへに親鸞一人がためなりけり、さ
ればそくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけん
とあぼしめしたちける本願のかたじけなさよ、嗚呼我等が罪業
なかりせば、如來に五劫思惟の御苦勞を掛け奉ることのある
べき、しかるによくもそくばくの業をもちける身にてあ
りけるを御あきれもなく、阿彌陀佛法藏比丘の昔平等の大悲
に催されて、愚痴無智、破戒無戒貧窮困乏、煩惱熾盛、五逆
十惡の私を御見捨てなき本願を建立したまひ、不可思議兆載

五濁惡世のわれらこそ、 金剛の信心ばかりにて、
ながく生死をすてはてし、 自然の淨土にいたるなれ。
金剛堅固の信心の、 さだまるときをまちえてぞ、
彌陀の心光攝護して、 ながく生死をへだてける。

必ず助けるの御約束の御言葉なめめてにしたが信心ぢや。故に御淨
土に向ひて、登れるか登れぬかと案じて見れば、千年を経つても間違
ひないと安心の出来る時は無い。登れるか登れぬかを案じるよりは、
御助け下さるゝか下さらぬかを思ふて見なさい。其様すると、いつ思
ふて見ても、如來様の御約束は、其儘助くるの仰せの外は無い。故に
何時思ふて見ても御助けの間違はぬ事が思はれる。如來様の仰せを除
けて置いて、淨土に向うて登れるか登れぬかを考へる故、しかと安心
が出来ぬ。夫れは向き處を違へて居るのぢや。安心は淨土へ向ひて登
れるに間違ひないと安心するて無い。如來様の御呼聲に向うて安心す
るのである。助けてやる登ることか引受けてやるといふ御呼聲に安心
するのである。(七里和上言行錄)

永却の間、我等三毒の衆生に對して一念一刹那も清淨ならざ
ることなく、眞實ならざることなき御親心の難有き、實に私
一人の爲に現はれたまひし親心、嗚呼此親様ましますは私
は永劫の間を免るとは不可能である、實に十方三世の間に唯
親様御一人て御座ります、五劫永劫の一分一厘も無駄なる
御修行はない、餘分な善根はない、皆私自身に罪惡あればこ
そ親様に御心配掛けました、されど其御心配は徹頭徹尾私を
御見捨なく、遂に正覺を成じて下さるればこそ私の罪惡の隅
々まで御慈悲の届かぬ隈はない、實に盡十方無碍光如來にて
まします、よくも此極惡最下の私を御見捨なき御慈悲、
實に極善最上の萬徳圓滿の南無阿彌陀佛にてまします、實に
破關滿願の不行、唯不可種不可説、不可思議と一念歡喜し奉
るの外はない。

此に於てや永々の間待兼ね下されし大悲の親様は御満足
に思召して攝取に光明におさめしたまふ、十方の諸佛も
護念したまひ、觀音勢至も勝友と宣ひ釋尊も善親友とほめた
まふ、聖人は極惡深重の衆生大慶喜心を得て諸の聖尊の重愛
を獲ると仰せ下された、是實に眞心徹到の結果である。嗚呼
何たる幸ぞや、何たる仕合せぞや、和讃に曰く、

講 話

明了堅固究竟願

「無碍の意義」

（求道學舎日曜講話）

近 角 常 觀

今日は『明了堅固究竟願』の題でお話する積りでありまし
たが只今無碍光如來の無碍の味ひに就き、大層お喜びの話が
ありましたから——今日お話申さうと思ふ事も結局此の味ひ
の外に無い事故、直ぐ夫れに續きて御話致さうと思ひます。
さて今もお話しの如く、無碍光如來の無碍とは、一切の煩
惱惡業の障りに支へられない、といふ事である。處て今日は
成る可く通俗に申しますが、其の煩惱惡業の障りに支へられ
無いと言ふは、煩惱惡業が障りにならぬのかと言ふに、もと
より夫れに違ひ無いが、其の障りにならぬといふは、我々腹
を立て、夫れで障りにならぬ、と言ふのでは、余りに味ひ方
が足らぬのである。煩惱惡業が障りにならぬといふのは、我
々煩惱が起らず、障りか來らぬと言ふ事は出來ぬども、遣る
瀬無きお慈悲をさく一念に、其の煩惱惡業の角が折れ、淺間
しき心の氷が融けて、あゝ淺間しかりし、申譯無かりしと、

所謂

罪障功德の體となる、こほりとみづのごとくにて、こほりおほきにみづおほし、さはりおほきに徳おほし。となるのである。煩惱惡業の方が我慢が出来なくなり、如來のお慈悲を支へる事が出来ぬやうになつて仕舞ふのである。煩惱惡業の方が、頭が下りて障りにならぬやうになるのである。

段々話が堅くなりませんが、凡そ世間の事でも、一番障りとなるは、此のお互の互に相碍へる心である。佛教の上でも、有碍、障碍など色々な言葉があつて、此の互にコツツ々突き當る心が、一番障りとなるのである。我々日常人と心が合はず、互に相ひ碍へ相碍て、争ひをする。此の碍へる心が一番人を苦むるので、之が人生争ひのもと、碍りのもとなのである。すれば人と相碍へ、隔てるのみが碍りかと言ふに、欲する物を得度いと思ひ、思ふやうにならぬとて、愚癡な心を取す。皆な之れ障りである。處が今無碍は、其障りが皆な取れるといふのであります。

今日は話が大層通俗になりましたけれども、私など信仰に入る時に一番困つたのが之である。善い事をすればするて、したといふ心が起り、人に親切をすればするて、自分が仕たといふ思ひが出て、何うにも之れに困つたのであります。其の時私が思ふたのは——之は茲の席では滅多に言はぬ、茲では何時も慈悲をうら／＼喜ばせて貰うて、こんな事は滅多に申さぬのであります。地方に參つた時は、屹度此のお話をす。夫れは私の信仰に入る前の苦しきと、夫れが如來の

であるが、私は心で自分が人に善く仕て居ると思つて居るのが悪いと思つて居る。處がさうは思ひつゝも、心中既に自分は善くして居ると思つて居るもの故、容易に心人に譲れず、益々人と隔てが出来て来る。さう思ふのは自分が悪いと、思つて居る丈け猶ほの事苦しむやうになつて来たのである。茲の處が肝腎なのであります。其の時私は斯く思つた。茲が自分が無碍にすべき處である。人が何にして自分の方が争はぬのである。何があつても無碍、無抵抗にさへすればよいのである。「自から佛に歸依したてまつる、願はくは衆生と共に大道を體解して一切無碍ならん」とある通り、一切無碍にさへなれば善いのである」と。處がさう出来れば善いのであるけれども、人間のする事は段々有碍となり、障りばかりとなりて来る。初めは夫程でなくとも、其の中に段々有碍となり、善き事にも有碍、悪しき事にも有碍、口を開きても有碍、嘿つて見ても有碍となり、何うしても行かぬ。其處で、此の間二月十五日曹洞宗大學の涅槃會でも私の信仰の經歷を話し、私は眞宗であるが、人生の此の點に苦しみて、信仰に入つたのである。人生の事は要するに上も下も皆な此の通り、之が人間の本性なのである。人間は何如に思ふても、自分で無碍、無抵抗にする事は出来ぬのである。其處になると、私はトルストイの無抵抗説は何うしても承知出来ぬのである。人間は如何に力めても、眞に無抵抗にはなり得ぬのである。實に有碍の人間なのであります。

其處で私は、斯く自分は有碍の障りある者であるが、若し

お慈悲ですつかり解けた時の心持ちとてあります。夫れは世の中は五分々々であるといふ事である。善い事をなし、正しく行つたにしても、此の五分々々といふ事を人間は離れぬのである。例へば自分が人に善くする。人に善くしたにしても、自分は人に善くしたのだとの考が離れぬもの故、人が自分に善くして呉れぬ時は満足が起らぬのである。さう思ふのは自分の修養が至らぬからだ、いくら努めて見ても、矢張り其の心が退かぬのである。だから人が自分に對し何と申して居るかといふ事は、自分が人に對し如何に考へて居るかといふ事を思へば直ぐ分る。甚だ通俗なるも、其の中の事は小は個人家庭の問題より、大は國家の大問題に至る迄、皆な之れなのであります。

て平日はこんな事言はぬのでありますけれども、トルストイといふ人が人生の平和といふ事を言ひて、其の根本は無抵抗であるといふ事を言ふ。對手が悪いから自分も斯くするとすると、何つ迄も抵抗になつと人生眞の平和の來る時が無い。故に平和にするには、先づ自分の我を捨てよ、抵抗を捨てよ、此方から譲れ、望むものは遣れ、人右の頬を打たば左の頬も之に與へよ、人生五分々々の綱を片方が離せば夫れ切りだ、といふのがトルストイの平和論である。私の苦しんだも茲である。出る杭は打たれる。道端の木樫は馬に喰はれけり、自分が善き事をすれば仕たに就け、自分は仕たといふ考に碍へられ、心に安心が出来なかつたのである。之が私の躓きのもとであつたのであります。

處で世人は皆な茲を中位になし、善い加減に通つて居るの

や若し向ふから無碍の心を以て向うて呉れる人あらば如何に嬉しからうと——茲の處が肝腎なのである。昔話になりすけれど、私共青年會をやつて居る頃の仲間佐竹觀海といふ方があつて、友人間てなされる事が其方丈け様子が違ふ。會など開きて皆んな一はなだつて話し、喰べ物など色々喰ひ散し、跡淺間しくして立ち歸つても、其の方丈け後に残りて、あと掃除をなし、あとを片づけてお歸りになる。私見て居て其れには何うも一言も出ぬ。人が何か理屈でも言ふのに、夫れに對しての態度なら自分にも出来るが、皆んながさん／＼取り荒した後で、夫を取り片づけて立つて行かれる、其の態度の無碍なるには、私敬服に堪えぬ。あの眞似は連も自分には出来ぬ。向ふから差し出て言はれるには此方からも幾らても言はれるが、斯く無碍の人には直に頭が上らぬ」と、苦しきまぬ前から私常に然う思つて居た。處が遂に最後に茲で突き當つて仕舞つたのであります。幾ら押へても人に隔ての心は去らず、我と我が世を不足に思ひ、偶々善い事を爲れば直ぐ鼻に懸る。猶ほ分りよく言ふ時は、自分だとして何も好みて有碍にするにあらず、好んで人と隔たてるのは無い。若し出来るならば、友とは眞に心打明け打け融け度く、一家では一厘一毛の隔てなく和合して行き度いのが腹一杯なのである。人が然うせぬから自分も出来ぬと、之が人間有碍の根本なのである。相手が然うせぬから、自分も斯くなると、之が此の世の千萬無量の理由となり、國に軍艦を浮べ兵を備ふるも之である。好ましくは無けれども、相手が然うするから自分も斯くすると、兎の毛の先きの塵程の事から、遂に世界の大戦

争も之れ一つで起るのである。支那の動亂として矢張り是である。清朝が斯うするから此方も斯くすると結局之れに過ぎぬのであります。

二

處て今申す如く私の心に之が取れぬ。自分だとして好みて此の苦しき思ひ起すて無けれども、世間が然うするから、人が斯くするから已を得ぬと、人間の心底は結局此の外に出ぬのであります。其處で、「若しや若し向ふより自分に善く仕て呉れる人あらば、自分だとして不足の念を持つ筈は無い」、猶ほ極言すれば「自分は悪い、悪しき心が止まぬ、隔て心が取れぬ。併し自分の此の苦しき様を見て、人より汝悪いと言はるれば一言無けれども、此の吾が悪しき心を知り抜いて、此の苦しき心根を推量して、成る程汝の苦しむは無理は無い。最もな事ぢや、汝の心底は能く分つて居る」と、此の有碍の心を知り抜いて、無碍の「お光り」——盡十方無碍の廣大なお光なるも、頂くは此兎の毛の先き程の處より頂かせて貰ふのである。——斯く心の底に人を隔て、悪しき心の止まぬ私に向つて、たつた一言でもよい。一言成る程汝は可哀相であると、言つて下さる眞のお心あるなれば、自分は身體も入らぬ、生命も入らぬ。其のお心一つで満足が出来やうものを」と、結局茲になつて來たのである。茲が肝腎なのであります。世間の事は何事でも結局は皆な茲に極まるのである。私が信仰に入りて以來、長い間多くの人にお話する上にしても、解決の着くは皆な茲一つで着くのである。私は斯くして半年程苦し

みた最後に、言葉で無く文句でなく、實際に其の無碍のお光に氣就かして頂き、今迄長い間自分は悪い、仕やうが無いと悲み、誰か此の吾が心の底の底を見抜き、此の苦しみを察して呉れる人は無いか。親兄弟にも之ればかりは察して貰へぬと絶望して、仕やうが無いと暮して居たのであるが、あゝ茲であつたか、茲を見抜いて私の其の隔てのある其處が可哀相である、其の有碍の離れぬ夫れが哀れてあると無抵抗、と言ひては言葉に角が立つて私は嫌ひである、矢張り無碍と申した方が有難い。其の無碍にして下さる方が大悲の佛でありしかと、茲の處で氣附かせて貰うたのである茲であります。實際我々此方から隔て、かゝつても、更に氣に支へず、此方から荒々らしくしても、アハ、と笑つて受け流して呉れる人ある時は、自然に此方から頭が下つて仕舞ふ。今大悲の親様は我々の悪い事、罪の深い事、夫れをすつかり知り抜いて夫れを見流して下さる位な腹で無く、其の悪い處のあるのか可哀相である。其の淺間しき心の止まぬが哀れてある、其者なり一切無碍に向ふより眺めて下さる。此の廣大のお慈悲が、言葉でなく文句で無く、實際に私の心に頂かれた處で、あゝ大悲の親様は、此の悪しき私を見捨て給はぬ廣大のお慈悲であるとは久しく聞いて居たが、あゝ茲であつたかとなり、茲が分るなり兎の毛の先き程の無碍が大無碍となり、何もかも皆な一邊に分らせて貰へるのである。すると今迄人を不足に思つて居たが、人が不足ぢや無い、自分が之を頂かなんだ爲である。夫れを今迄人にばかり要求して居たのは、實に自分

が悪くかつたとなる。すると今迄の如く、向ふが悪いから自分も斯うするては無い。今迄之を知らずに居たのだが、あゝ自分が悪くかつたな、成る程自分が之れだもの、人が然うする筈だつたとなる。あゝ成る程自分が悪くかつたな、今迄人が善い悪いと言ふて居たが、自分が淺間しい心で之を頂かなんだ爲め、善い悪いと人にばかり目を付けて居たのであるが、あゝ決して人に一分一厘の無理は無い、悪いのは皆な自分一人であつたなと、分らせて貰へるのであります。

茲にお集り下され、お喜び下さる皆さんは、今私が言ふ程に緻密な筋道を経てお喜びなされたのでは無けれども、皆な此のお慈悲を有難いと一念お頂きになるなり、あゝ有難いとカラ／＼と無碍になりてお喜び下さるのである。茲になると、何とも申さうやうが無い。實に氷の融くるが如く、世の岩をも鐵をも溶かして下さるが、大悲の思召であります。

て今日は自分の苦んだ時の事を、大分細かく申しますけれども、私の苦しんだ時には、如何なる親友も皆な呆れて仕舞つた。其代はり安心して再び東京に出る時には、私は然う思つた。今迄是程人を悪しく思つて、自分の淺間しき心の底をすつさり人に見られて仕舞つた、もう自分如きを誰も相手に仕て呉れぬだらう。併し此のお慈悲一つを頂かして貰うた上は、此の遣る瀬無きお慈悲一つが百人力である」と。然う思ふて東京へ來ると、友人は皆な、あゝ「君は大變よくなられた、もう本復せられぬかと思つたが、まあよかつた」と手を取つて喜んで呉れる。私は實に意外である。一體私が善くなつて、人が此のやうに善くして呉れるのか、初めから人は此のやう

に善くして呉れるのを、自分が思ひ違ひ仕て居たものか、自分で分らぬ位である。見るもの聞くもの、世の中の物皆な自分を喜び迎へて呉れるのである。昔から悟道の人が「草木國土悉皆成佛」と謂ひて、草木でも國土でも、皆佛に成るといふ事を言ふが、眞に草木國土を初め何を見ても皆な我を喜び迎へて呉れ、さながら世界中が、これは／＼と手を打つて自分を持ち受けて居てくれたもの、如くである。茲になると世の中の事、何にても皆な意味が出來て來る。斯く言へばとて、茲に花が咲いてあるは、之も如來のお慈悲の現れだと思ふて喜ぶのでは無しに、如何にも釋尊成道の時に、三千世界に光りが充ち満ちたとあるが、其の如く私共眞に盡十方無碍光如來に遇はして頂いたもの故、何から何迄皆な光り輝くのである。『和讃』に

光雲無碍如虚空、

一切の有障にさはりなし。

光澤かむらぬものぞなき、難思議を歸命せよ。

如何にも此の廣大のお光りに遇はして頂いた時は、世の如何なる氷も岩も融け、一切無碍になり、光澤蒙らぬものは無くなつて仕舞ふのであります。

大分今日の話は細かくなりましたけれど、つまり私は茲の味ひを世の中の人に頂いて欲しいのである。一應信心信仰と言つて居つても、茲の味ひがはつきり頂けぬと、信心が障りになつて仕舞ふていかぬのである。併しながら茲に注意を爲ねばならぬ事は、茲で自分が無碍になつたと思ふと遣りぞこなうのである。すると自分が佛になつて仕舞ふから、いかぬのである。今無碍は、佛の無碍を頂いて、此方の頭が下つた

處なのである。

之に就き、又私の常にくつ着ける話でありませうけれど、信仰以前は、人が無碍にして呉れば、自分も無碍に眺める事が出来よう、と思ふのであるけれども、此の度には、人が如何に有碍にし、如何に悪しくし、如何に不實に仕やうとも、「現に自分もお慈悲を頂かぬ前は。斯く爲し、斯く思ふて居たので無いか、人が斯くするのも實に尤だ、之は人を不足に思ふ可きで無い、寧ろ何うか早く此のお慈悲を人にも頂かせ、自分と同じ喜びに任せて遣り度いものだ」となる。成る程其の通りには違はぬも、之には一寸悪い處がある。夫れは「自分もお慈悲を頂かぬ前は」と言ふのは、はや既に其の心の中には、頂いた今は前とは違ふ積りであるのである。茲の處が一寸であるけれども、いかぬのである。

之に就き、いつも申す、例の香樹院師の順禮の話であります。或人の處に夜二十四晝廻はりの順禮が泊めて貰うた。其の様子を見て居ると、夜になると其の順禮が、お佛壇の方に足を投げ出して寝て仕舞ふた。其人其の様子を見て、「あ、二十四晝廻はりをする程の者であるに、如何にも淺ましい事をする、しかし自分もお慈悲を頂かぬ前は、實に斯の通りであつたのだ、之は自分もお慈悲頂かぬ前の姿を見せて下されたのである」と、其人深く喜びて其事を香樹院師に話されると、香樹院師の仰せらるゝには「夫れは俺の氣持ちは違ふ。俺はそらぢや無い。現在の俺の姿を見せて下されたのであると喜ぶ」と仰せられたといふ話である。「自分の頂かぬ前の姿」となる」と、今は頂いて居るから」といふ事になり、いつの間にか有

碍になつて來るのであります。

信仰後に多くの人の苦しむは、屹度茲からである。信後にも、動もすると茲の處に取り違ひがあるもの故、苦しむ事があるのである。其の時に「あ、人が色々悪しくすると思ふて居るが、矢張り自分が其の根性を持つて居るのである。あ、有難や、此のやうな奴を見捨て給はぬ無碍のお慈悲でまします」と、斯くの如くなる人に對し自分は「お慈悲を頂いて居ると、區別の出來る所は更に無い。矢張り自分も昔に變はらぬ有碍の淺ましい奴なのである。唯前は自分は有碍でありながら、有碍でよいと思ふて居たのであるけれども、今は有碍は有碍なるも、此の有碍の仕て見やう無き者を見捨て給はぬ佛の無碍のお慈悲が有難いとなつたのである。

又之と反對に、自分は「お慈悲を頂いたの故、無碍に出來ねばならぬ、世間に對し、周圍に對し、無碍にせねばならぬならぬと苦しむ人がある。人に對しても善くせねばならぬ、自分の行ひも正しくせねばならぬと、自分が無碍にする上に、非常に苦しむ人があるのである。之も、いかぬのである。人間は本來有碍のもの、設ひお慈悲頂かぬが、此の五分々々の心を人間が捨てられやうと思ふて居るのが間違ひである。人間は此の肉體を持つ以上、五分々々の心は一分一厘も捨てられぬ。それが當り前である。設ひ信仰の事を人に言ひ聞かすにしても、人が思ふやう自分の言ふ事を聞いて呉れぬ。其の時に何て人が聞いて呉れぬのかとなると、矢張り有碍になる。故に人間は如何なる場合でも、設ひお慈悲頂いてから後と雖、自分が無碍に出來るなどは言へぬのであります。

之に就き初めに申したトルストイの、人には抵抗せぬのぢや、讓るのぢや、といふ説が段々高じると、國の法律も悪い、戦争も悪い、一切のもの皆な悪い、といふ事になり、國家は成り立たぬ事になつて仕舞ふのである。甚しきは、トルストイの愛讀者は、國家の戦争を否認して、大間違ひを惹き起す如きに至るのである。之れは自分が佛の如く無碍に出來ると、思ふて居る間違ひである。小供が菓子を取らんとて、子供の爲めを思はず、言ふがまゝに勝手に與へるばかりが親の慈悲では無い。爲めにならぬ事は、嚴しく戒めて、思ふ儘にさせぬが、慈悲である。無碍だからとて、何も人に優さしくするばかりが必ずしも無碍に非ず、此の事は善く無いと分れば、夫れは善く無いと氣を強くして、人に思ふさま言ふ事が出來るが無碍である。如何に人に打解るが無碍なればとて、人が悪事をするに對し、黙つて心で彼れ是れ隔て、居るが無碍で無い。其の悪が眞に悪いと、強いて其の者に言ひ聞かせ得るが無碍である。然らう爲し得る迄に、心に安心の得られるのが無碍なのであります。

而して之れが世間の上の事てなく、盡十方無碍光如來が常に私に然うして居て下さるのである。我々が世間の事に執着して、悪い事を爲し居れば、如來は善巧の御方便を以て、之を誠め氣を付けて下さるのである。其の、然うして下さるお心は、我々が悪いからとて、叱り懲らしめ給ふのでなく、汝が其の悪しき者である故に、茲に親が待つて居るぞよ、何うか此の吾が親心を頂き呉れよと、嚙んで含めるやうに、我々を追ひ立て導いて下さるのである。故に世間の出來事は一つ一

つを見れば、自分の心に叶はぬ事も出來て來るも、皆な一々に意味あつて、此の私が悪いばかりに此の者に眞のお慈悲を頂かせやうと、色々和我々を教へ導いて下さるのである。之れがあなたの無碍の親心であります。

さて斯く無碍の味ひは、表裏何れよりも言ふ事が出來るのであるが、之が外にあるのでは無い。先きにも申す如く、此の世の中は我々が心に「俺が」と出るなり、其の心が忽ち何から何迄に影響して、一時に皆な塞がつて仕舞ふのである。處が此の無碍は、斯る世間向きの上より頂くに非ず、此の無碍光佛の廣大なるお心を頂く時は、實に極り無き慈悲にて、

『和讃』に

盡十方の無碍光は、無明のやみをてらしつゝ、

一念歡喜するひとを、かならず滅度にいたらしむ。此の廣大なる大悲のお心を頂くなり、忽ち無碍の光明中に攝取せられ心も言葉も絶え果て、此の一念に充分に頂かせて貰ふのである。又

無碍光の利益より

威徳廣大の信をえて、

かならず煩惱のこぼりとけ、すなはち菩提のみづとなる

罪障功徳の體となる、こぼりとみづのごとくにて、

こぼりおほきにみづおほし、さはりおほきに徳おほし。

名號不思議の海水は、逆謗の屍骸もとどまらず、

衆惡の萬川歸しぬれば、功徳のうしほに一味なり。

盡十方無碍光の、大悲大願の海水に、煩惱の衆流歸しぬれば、智慧のうしほに一味なり。茲になりては、世の中に無碍光のお光りの中に納まらぬも

あは一つも無い。我々一人々々の心の上に、又一家の上に一國の上に、乃至社會の上に、此の無碍の光が隈無く行き渡つて下さるのである。トルストイが如何に無抵抗主義を主張しても、八十九迄長生きして、死ぬ時家を出て隠遁しなければならぬのは、未だ眞の無碍の味ひが味はへて居たのでは無い。吾が浄土眞宗は親鸞聖人が、家庭の上に、國家の上に、社會の上に、我々一人々々の心の上に、此の廣大な無碍の味ひを知らせて下されたのである。何も之れが親鸞聖人に初まつたのでは無けれども、實に聖人の御一代は身自ら此の無碍の味ひを頂いて、夫をば一代の間身に行うて見せて下されたのである。實に此の味ひこそ、之ぞ眞實の無碍、之れならば、世の如何なる社會主義も危険思想も無くなつて仕舞ふ、如何なる悪思想も、之にかゝれば頭が下らぬといふ事は無いのである。之でなくては、世の悪思想の善くなるといふためしは無。此の味ひは之を必ずしも眞宗ばかりとは言はぬ。何宗でも佛教は凡て皆な茲なれども、他宗では自力で茲に至るのである。處が我々は無明がひどい故、此の如來の無碍のお光を頂き、茲に到らせて貰ふのであります。

三

處て、此の阿彌陀佛の無碍のお慈悲を頂かせ貰ふ上に就き猶ほ申すべき事は、我々「此の悪い心の有るなりて助る」惡るうても如來のお慈悲ぢや」など、言つて居るのは、まだ充分に此の處が頂かれて居無いのである。此の眞に如來の遣る瀧無き思召の頂かれた味ひは、恰も湖の底迄氷着いて

は無い。「日藏經」「月藏經」の中に、有りとする天神地祇が念佛の人を護持養育して下さると、お説きなされてあるのである。之をば示し下されたのである、夫れを又「和讃」には、

南無阿彌陀佛をとふれば、この世の利益さはもなし、
流轉輪廻のつみさえて、定業中天ぞこりぬ。

南無阿彌陀佛をとふれば、梵王帝釋歸敬す、
諸天善神ことごとく、よるひるつねにまもるなり。

南無阿彌陀佛をとふれば、他化天の大魔王、
釋迦牟尼佛のみまへにて、まもらんとこそちかひしか。

天神地祇はことごとく、善鬼神となづけたり、
これらの善神みなともに、念佛のひとをまもるなり。云々。

斯くの如く『現世利益和讃』の上には此の心の上の無碍が世の形の上に顯はれる味ひを指示下されてあるのである。我々の心の上の有碍が取れるばかりが、無碍のお慈悲では無い。此の廣大な無碍のお慈悲を頂けば、此の世の形の上の有碍が、取れるも、皆な取れるのである。實に此の廣大な佛のお力の前には、天地に充てる諸の悪鬼神が其の障りが出来ぬばかりか、恐れて其の者を敬ひ護るに至るのである。之れ皆な廣大なるお慈悲が、充ち満ちて下さるからであります。又

阿彌陀如來來化して、
息災延命のためにとて、

金光明の壽量品、
ときおさ給へるみのりなり。

山家の傳教大師は、
國土人民をあはれみて、

七難消滅の誦文には、
南無阿彌陀佛をとふべし。

國土人民の上にも此の無碍が、現はれて下さるのである。併しながら、肝腎の佛の無碍を頂かずに、唯言葉の上に、形ば

あるのが、底迄徹底するお慈悲の光に照らされて、其の氷の大塊が底の底から浮び出づるが如く、久遠劫來の無明業障のおそろしき罪咎が、底の底より一時に皆な融け浮びて仕舞ふのである。夫れ故我々、お慈悲を頂いてからの悪業煩惱は底の根が切れても上に花の咲くやうなもの、氷が全く無くなるかといふに、氷は矢張りある事はいつ迄もある。有るけれども底の根が切れてる故に、彌々となればお慈悲、一まきとならせて貰う事が出来るのである。之れが盡十方無碍の廣大なおはたらきである。故に此のお慈悲が一點心の中に入りて下さる時は、如何なる我慢の者も頭が下る、如何なる邪見の者も、頭下げずには居られぬのである。『和讃』に

本願圓頓一乘は、
逆惡攝すと信知して、

煩惱菩提體無二と、
すみやかにとくさとらしむ。

如何なる逆惡の者も、心底より無碍の態度となり、無我の心持となり、打解けさせて貰ふ事が出来るのである。又、古來よりいふ言葉に、

鬪浮八萬四千城、干戈を動かさずして太平をいたす。娑婆の八萬四千の煩惱の若も、一兵をも動かさずして太平を致す事が出来るのであります。

又親鸞聖人『歎異鈔』のお言葉には、

念佛者は無碍の一道なり。そのいはれいかんとなれば、信心の行者には天神地祇も敬服し、魔界外道も障礙することなし。罪惡も業報も感ずることあたはず、諸善もあよぶことなきゆへに、無碍の一道なり云々。

かりて南無阿彌陀佛を稱へて居るのではいかぬ。源の、佛の絶対の無碍を頂く處で、初めて、此の、世の障りは皆な除かれるのである。

又、親鸞聖人の『御消息集』の

念佛まふさん人々は、わが御身の料はおぼしめさずとも、朝家の御ため國民のために、念佛をまふしあはせたまひさふらは、めてたふさふらふべし。往生を不定におぼしめさん人は、まづわが身の往生をおぼしめして御念佛さふらふべし。わが御身の往生一定とおぼしめさん人は、佛の御恩をおぼしめさんに、御報恩のために、御念佛ころにいれてまふして、世のなか安穩なれ、佛法ひろまれとおぼしめすべしとぞおぼえさふらふ。

此のお言葉なども矢張り茲である。併しながら之を聖人が、朝家の御ため、國民の爲め、念佛を申せとあるのだから、朝家の爲め國民の爲め念佛稱へるのであると、眞宗の意味を無理に他の意味に引きつけて、國家安穩の祈禱をするのであるとなると、大違ひとなる。聖人の思召は、お慈悲の上より、何うか此のお慈悲の國中の人々に行き渡り、國にひが事など起らぬやう、朝家の御爲め國民のために念佛申し合せ候べしと、指示なされたのである。自分と何れわけ考の違ふ人にも、乃至設へ此のお慈悲に仇をする人の上にも、何うか此の遣る瀧無きお慈悲の分つて下さるやうにと、南無阿彌陀佛と念佛する、實に此の一念は、我々の小かなる胸中に宿つて下さる一念なるも、實に是れが天地を動かし、世界を動かす光りである。實に茲が無碍の味ひの此世の上に現はれて下さる

有難い處であります。

夫れ故、先程も申す如く、此の無碍の味ひは、強くなれば何れ丈けても強く現はれるのである。法然聖人は御流罪の時に、「設ひ源空死罪に行はるゝとも、此の念佛ばかりは止められぬ」と。實に強い言葉である。此の言葉など一寸と見ると、嘗つて或人が私に、法然聖人も我慢な事は出来たやうに見えると言はれたが、然うぢや無い、實に茲は法然聖人の血の涙である。法然聖人にすれば、實に一向専修の教法は、此の罪惡深重の淺間しき愚癡の法然を助けて下さるが、一向専修の南無阿彌陀佛斗りであるのに、之に人の言ふ如く、諸の餘行餘善を混入して、善い者でも助かるとなれば、折角の選擇本願が空しくなつて仕舞ふ。そんな事して、此の淺間しき惡逆の者が助かる南無阿彌陀佛の御眞意が言へぬ位なら、寧ろ死んだ方がましである。設ひ如何なる事が有らふと、斯の罪業深重の源空が助かる唯一の南無阿彌陀佛である以上、此の念佛ばかりは殺されても止められぬ」と、茲は眞にあなたのこゝろ底より、血の涙で仰せられたのである。で一方では聖人は、自分が流罪に遇はふと、死罪に遇はふと、少しも不足に思召しては居られぬ。却つて「此の時にあたりて邊鄙の群衆を化すること莫大の利生である」と喜びなされ、『法華經』の中に、常不輕菩薩が杖木瓦石の苦に遇うて却つて之を縁として諸の衆生を佛法に引き入れて下されたといふ事が書いてある。其の事をば、お引きなされて、「其の如く自分も讃岐の鹽飽島に行き、如何なる苦に出遇ふと觸るれば觸るゝ處に御縁が開かれ、世の障りが加はれば加はる程益々光が現は

れて、益々諸人のお慈悲に着くが、廣大の御本願である。故に斯く自分の思はざる難儀に遇うて苦勞するも、是れ佛法の廣まつて下さる初まり、大もとである」と、斯く法然聖人は更に不足の念なく、喜んでお出なさるのである。茲が實に有難いのであります。

て私は常に思ふ。昔から殺されて死んだ人、流罪に遇つた人を數ふれば、山程あるのである。然るに宗教家が一人殺されると、夫をばえらい事のやうに言ふ。而して他の人の事は餘り言はぬ。親鸞聖人法然聖人の流罪と言つた處が、たつた五年である、住蓮安樂の死罪と言つた處が、たつた二人切りの事である。然るに他の人の死罪流罪は餘り言はず、親鸞聖人法然聖人の事はかり言ふのは、他の人の死罪流罪は、有碍で之に應じたの故、意味が無いのである。爾るに親鸞聖人法然聖人は無碍であつた故、其處で有難いのである。死罪流罪で苦勞して下されたのが有難いので無い、其處が全くの無碍である故、貴いのである。死罪流罪が有難いとなると、世に其の例は山程有るも、其の死罪流罪に遇ひて、如何なる憂き目を見ても、更に不足と思はて、其の我を罪して佛法に仇を爲す者に、何うか此のお慈悲を頂かせて遣り度いと、親鸞法然兩聖人の流罪は、茲の所で全くの無碍になつてある。そこの所の御示しが『古德傳』の中にあるのである。

……此の時にあたりて邊鄙の群衆を化せんこと、莫大の利生なり。但痛むところは源空興する淨土の法門は濁世衆生の決定出離の要道なるがゆへに、守護の天等定めて冥暎をいたさん歟。もししからば貧道が流罪、弟子が斬刑、かく

のごときの事前代未聞、こと常篇に絶えたり、因果のむなしからざることいきて世に住せばおもひあはずべきなり云云。

「源空が教ふる所の淨土の法門は、今日の生死罪濁の人間が救はるゝ唯一の法である。爾るに此の法に仇をする時は、佛法守護の眞衆の怒りに觸れ、何か世の中に障りが出て來はせぬかと、歎き思ふ」との言葉である。之なども、有碍に取ると大變である。有碍に取ると、「自分の法は、えらい故、之に逆らうと罰が當るぞ」との意に取れるのである。處が之は誰の法彼の法といふ如き小さい話で無く、實に此の法は、諸の天神地祇守護の法なれば、之れに逆らふ者は、毛を吹いて傷を求むる如く、何のやうな魔事に會ふかも知れぬ、痛ましい事ぢや」と、お歎きなされたのである。で後に果して承久の亂が起りて、世の中大騒動になつたといふのである。親鸞聖人は即ち其の事を『御消息集』の中に言はれて、

さればとて念佛をとめられさふらひしが、世にくせごとくのをこりさふらひしかば、夫れにつけても念佛をふかくたのみて、世のいのりにこゝろをいれてまふしあはせたまふべしとぞおぼえさふらふ。云々。

即ち大師聖人の時、念佛を停止せられたら、色々禍が起つたが、今度も其の如き禍の起らぬやう、世の中が亂れぬやう、世の祈りに心を入れ、世の中安穩なれ、佛法弘まれかしと、朝家の御爲め國民の爲め、念佛申せと仰せ下されたのである。此の念佛の法に妨げを爲す時は、屹度何等かの障りが起る、故に其の障りの起らぬやう、御報恩の爲め御念佛喜べと、お

示し下されたのである。斯くの如く、盡十方無碍故、其の上へ〜と重なつて來るからたまらぬ。夫れ故、遂に此の仕様の無き私の心の上にも頂かせて貰へるのであります。

四

さて今日の題は『明了堅固究竟願』といふのであります。之は『大經』の中に、

無量壽佛の威神力の故に、本願力の故に、満足願の故に、明了願の故に、堅固願の故に、究竟願の故に。

といふ言葉があり、佛の廣大な御本願の味ひを、色々言葉を重ねてお示して下されてある。其中に、斯く、威神力本願力満足願といふ言葉も加はつてあるのてあります。先づ「威神力の故に」といふは、『大經』願成就の文の處に、

十方恒沙の諸佛如來、皆な共に無量壽佛の威神功德の不可思議なるを讚歎したまふ。

とありて、佛に非常の威力があつて、其の力が我々の上に加はつて下さるが威神力である。威神力と言へば大層言葉が強くなるも、親鸞聖人は此の言葉を澤山使つてお出になつてあります。『淨土論』の初めに、天親菩薩が

世尊我一心に、盡十方無碍光如來に歸命したてまつり、安樂國に生れんと願ず

と仰せられてある。此の「歸命盡十方無碍光如來」の處に曇鸞大師が註をせられて『論註』の中に、

夫れ菩薩の佛に歸する、孝子の父母に歸し、忠臣の君后に歸して、動靜己に非ず、出沒必ず由あるが如し。恩を知り、

徳を報ず、理宜しく先づ啓すべし。……と言はれて、菩薩の佛に歸するは、孝子の父母に事へ、忠臣の君后に歸するが如くである、と言はれ、其の上に、又所願輕からず、若し如來威神を加へたまはずば、將何を以てか達せん。神力を乞加す、このゆへに仰て告げたまへり。我一心とは天親菩薩自誓の詞なり。云々。

と仰せられてあるのである。即ち威神力とは、自分の力が一分一厘あるのでは無い、佛が廣大なる威神力を加へ給ふにあらずんば、何うして信心を頂く事が出来やうかと、お示し下されたのである。私は、親鸞聖人の加威力のお言葉は、恐らく茲から出たのだらうと思ふのであります。て聖人は肝腎の處には、いつもの此のお言葉をお使ひなされてあるのである。『教行信證』でも『略文類』でも、信卷の初めに、此のお言葉があるのである。即ち『教行信證』では、

然るに常没の凡愚流轉の群生、無上妙果の成し難きにはあらず、眞實の信樂實に獲ること難し。何を以ての故に、乃し如來の加威力に由るが故なり、博く大悲廣惠の力に因るが故也。遇淨信を獲ば、是の心顛倒せず是心虚偽ならず、是を以て極惡深重の衆生、大慶喜心を得れば、諸の聖尊の重愛を獲る也。

即ち、我々常没の凡愚、流轉の群生、無上妙果を成じて佛になる事が六かしいのでは無い、其の大もたらざる眞實の信心を得る事が、實に難いのである。其の難い信心が何て得らるゝのであるか。乃ち如來の加威力に由るが故に、得させて貰へることを示し下されたのである。即ち、我々の斯んな淺間しき

れを御引用なされてあるのである。其の御釋に、本願力の故にとは、即ち往くことは誓願の力なり。

即ち我々が信心を頂いて、如來の威力の加はつて下さる一念に願生彼國即得往生と決り。頼む一念の時、往生一定御たすけ治定と決るのであるが、其の決るは自分の力で決る。ぢや無い、即ち往くことは誓願の力也。て本願力の遣る瀬無きも力一つで決めて下さるのである。此の間も大草師の御往生の事申したのであります。先日も佛前で、當法主臺下の私の亡父へ下された御消息を拜讀すると、

夫れ人生のはかなきことは、風前の燈、水上の泡の如し。ゆめゆめ油斷すべからず。かるが故に、淨土眞宗の勸化は、平生業成の信の一念にて、往生の得否は定るものなり。是れ皆な彌陀他力の強縁に催うさるゝものと心得ふべし。云々。

往生の定るは平生頂く信の一念にて定るのである。大草師の死なれたも、死なれは此の間法の爲め身を捧げて満足して逝かれたのであるが、眞の往生は、三年前に頂かれた信の一念にある。是れ皆な彌陀他力の強縁に催うさるゝものと心得べしである。これが本願力の故にであります。

次に『満足願の故に』同じく『述文贊』の釋には、満足願の故に、願として缺くところ無きが故に、

と。親鸞聖人が『述文贊』のお好きなのは、斯くの如く、一々キチン〜と決めて書かれてあるからである。願として缺くるところ無きが故に」と。彌陀佛の御本願には一つとして手落ちが無い。斯くも仕て遣り度い〜と、親が子供に手

心を知り抜いて、呆れも爲給はず、其の淺間しいのが哀れてある、悪いのが可哀相であると、常に私に向つて遣る瀬無きお心を差向けて下さる處、茲が廣大なる威神力の加はつて下さる處なのである。之を『改悔文』で頂けば、

もろ〜の雜行雜修自力のこゝろをふりすて、一心に阿彌陀如來、我等が今度の一大事の後生御たすけさふらへたのみまをして候。たのむ一念のとき往生一定、御たすけ治定と存じ、このうへの稱名は御恩報謝とよろこびまをし候。

とある、茲である。此の廣大な加威力がましますで無ければ、我々何うして御信心が頂けるものか。南無阿彌陀佛々々々。次に『本願力の故に』——親鸞聖人は『大無量壽經』の註釋の中で、懽興師の『述文贊』といふ書が大層お好きである。聖人は廣く見てお出になるも、お好きの本は大抵決まつてある。

お經の中では、三部經の外では『涅槃經』、又『大經』の註釋の中では、此の『述文贊』が好きで、『教行信證』の中に度々引用してお出になるのである。善導大師や曇鸞大師の御本を引かれてあるのは七祖聖教の事故當り前なれど、其の中に此の『述文贊』が出てあるのである。又『大經』異譯の中では、『無量壽如來會』がお好きである。七祖聖教の中で言へば、曇鸞大師の御本がお好きである。又善導大師の中では、『散善義』といふ具合に皆な決つてある。て私など、せめては聖人御愛讀の書だけは拜見し度いと、疾くより心懸けて居るのでありますけれども、まだよく拜讀する事が出来ませぬ。其の『述文贊』の中に、茲の所の御釋があつて、聖人は『行卷』の中に夫

落ち無きが如く、大悲の佛より私に差向けて下さる親心には一つも手落ちが無い、故に満足願の故にである。ものは淺間しき處を申さぬと、有難い處が分からぬが、私は信仰以前四十八願を拜讀して、こんなに色々並べてあつては却つてゴタ〜としてや、こしい、一層他の宗教の如く、もつと簡潔であつたら、など思はぬでも無かつた。處が彌々頂いて見ると、『四十八願一々願して曰く、若不生者不取正覺』て、何れも〜皆な有難いのである。第一には無三惡趣の願で、我が國に生れた者は、再び三惡道に歸らぬやうにと、第二には悉眞金色の願で、我國に生れた者は、悉く眞金色でなれば正覺を取らぬと、斯くの如く一々お誓ひ下されてまだ夫れでも足らぬから天耳通を、夫れでも足らぬから神足通を、乃至光明無量壽命無量、四十八願一々皆な此の遣る瀬無きあなたの思召なのである。勿體無けれども、私など、そらて一々言ふ事も出来ぬ位である。

之に就き又昔話になりますけれども、此間加藤氏の告白にも茲がありました。私が獨逸ミュンヘンの或る牧師を訪ねた時、其の牧師の家で村の勞働者の着物を洗濯して遣り、一々札を着けて乾かしてあるのを見た。私は之に氣を附け、成程之は面白い、日本などでは慈善事業といふと、直ぐに物を施したり、病院建てたり、大仕掛けの事ばかり考へるに、村の洗濯して居る暇の無き勞働者の着物を洗濯して遣るとは、如何にも注意周到であると、ひどく感心してふと氣がつくと、

設ひ我佛を得たらんに、國中の人天、衣服を得んと欲はゞ、

念に隨て即ち至らん、佛の所讚の應法の妙服の如く自然に身にあらん。若し裁縫擣染洗濯することあらば正覺を取らじ、

と、ちやんと三十八の願に夫れがあるのである。私は之れに氣が附いて、之れは今迄何思ふて居たのであるか、斯く佛の御本願に、我が國中の者若し衣服を得んと思はゞ直ぐ至るやうにと、斯くちやんと誓ひ下されてあるのに、夫れを今迄逆さまに考へて、西洋の宗教には之れがある、我が佛教には之が無いと、多少好ましくも考へたのであるが、あゝ茲が分らなんだ爲めに、態々西洋迄來て、洗濯に感心したのであるか。西洋の經文には之が無くて、自分の平日頂いて居る御經に却つて之があつたのであるか」と、餘りに強く感じた故、『信仰の余瀝』の終りに、此事を書いて置いたやうな事である。是れが實に願として缺くるところ無きが故にである。猶ほも一つ申すならば、私は平日「放つたらかし」の性分で、人から手紙頂いても、中々返事が出せ無い。處が夫れが、今茲が肝心の處ぢやといふやうな處になると、何かを捨て置いて手紙が書けるのである。人は私の小かい處を性分ぢやと思つて居らるゝのであるけれども、性分は放つたらかしなのである。けれども其の放つたらかしの奴が、今茲一つて慈悲が届いて下さる處だ、といふ處になると、何かを考へて居る暇が無い、直ぐ手も動き、又平日如何程御無沙汰して居る處へても、足を運ばずには居られぬやうになるのである。是れが、此の行き届いて下さる慈悲が居て下さるからである。此の慈悲

悲が着き添うて下されて、私を導き下さるのである。實に願として缺くる處無き大願である。

五

次は「明了願の故に」『述文贊』には

明了願の故に、之を求むるに虚しからざるが故に。と。此の慈悲の上からは、道を求めて求められぬは無く、淨土を求むれば必ず往生を得るのである。其の求むるは此方より要求して得るに非ず、遣る瀬無き御本願の方より此方へ差突けて下さるのである。『和讃』に

本願力にあひぬれば、むなしく過る人ぞなき、
功徳の寶海みちくして、煩惱の濁水へだてなし。

私は思ふ。人生に成功出来ぬといふ事はなく、求めて得られぬといふ事は無いと、之は確かに私はさう信じて居るのである。併しながら之を求るに道を以てせぬ時は夫れが得られぬ。道を以てすれば、求めて虚しいといふ事は無いのである。世の中に何故やりぞこなうかと言ふに、通る可き道を通らず、有碍でやるから、通れぬのである。夫れが自分の力では出来ぬ。如來の方より廣大の力で自然に其處に引き寄せて下さるから、得させて貰へるのであります。

次に「堅固願の故に」『述文贊』には、
堅固願の故に、縁として壞すること能はざるが故に。

と。如何なる縁と雖も、此の如來の大慈悲を壞はす事は出来ず、如何なる縁と雖も、此の如來の慈悲を障る事が出来ぬ故に、堅固願である。斯く如來の慈悲の行届いて居て下さ

悲が居て下さる時には、幾ら考へたつて、私事で運ぶものには無いのであります。

猶ほ今日は思ひ出す事皆申しますが、嘗つて甲州の方で、或る夜私の門前より、一人の子供に手紙をつけてよこされて、其の様子が何となく、其の子供を私の許に托して、自分は自殺でもされ相な状況である。其處で私は夜を徹して其の人の在り家を求め、漸く捜しあて、見ると、果して狂ひじみた様子である。夫れて人を遣はし、色々慰めて、聞くに其の方は深き私を信じ下され、子供の事は兎に角私に頼みさへすればよいと思つてお出下されたやうであつたのである。其後度々九段へも聞きにお出下されるやうになつたのであるが夫れがどれだけお聞き下されても充分に届か無い。其の中に二三年経ち、遂に其の方が水死せられたといふ事を聞いたのである。私は、あゝしまつた、あれ程御縁のあつた方を、充分此の慈悲を知らせずしてと、残念で仕様が無い。其のしばらく以前には私が甲州に參つて、車上で其方と出會ひ、挨拶して分れた事さへあつたのである。此方と、前に高野山で『求道』を側に置いて自殺して居られた方と、此の二人の方が私は今に忘れられぬ。盡す丈け盡くしたら、此の慈悲が届か無つたものかと、今に残念で仕様が無いのである。夫れといふも何故か、佛の本願が、願として缺くる處無き大願であるからである。此の行き届いて下されてある御本願を折角縁ありながら充分に傳へる事が出来無つたからである。猶ほ日常世間の日暮しの上より頂いて見ると、此の世の事には一々の事に皆な悪い事が着いて來る。其の爲め其の一々の事に佛の慈悲

る事は、茲の言葉何れ讀んでも、一語々々に大悲の力の大きな事が現はれて、下さるのである。世間で言へば、火の縁にあへは物は焼くのである。處が如來の慈悲は、火の縁にも焼かれず、水の縁にも腐れず、世間の刀刃の縁に遇ふても、切られぬのである。

さて段々斯く申せば、夫ても信仰家だつて病氣もあり、思ふやうにならぬ事も有るて無いか、第一斯く言ふあなたも一向人生に成功して居ぬて無いか、と言はるゝかも知れぬも、信仰上の成功は、世間の上の成功とは違ふ。信仰上の成功は、如來の遣る瀬無き大悲が、世間の色々の事柄によりて漸次世に現はれて下され、慈悲の御縁の日に、開けて下さるのが成功なのである。故に動もすれば、世間に失敗して、慈悲の上で成功する事があるのである。一寸言ふと、先き程も申した現世利益和讃に、親鸞聖人は「阿彌陀如來來化して、息災延命のためにと云云」とお示し下されてある。處が實際に親鸞聖人は御流罪の時、住蓮安樂と共に死罪と決まつてあつたのを、六角中納言の懇請によつて、其の死罪が沙汰止みになつたといふが、其處である。私は聖人の現世利益和讃は、屹度聖人が此等御自身の深き御經驗の上より、御感じの餘り御製作下されたものに違はぬと、頂いて居る事である。猶ほ申せば、若し此の時聖人が死罪になつて御出で、あつたら、淨土眞宗は興つて下さらぬ。すれば此時聖人の命の延びたは、我々が永切の生命の延びたものである。すると、そんな事出来る位なら、一層の事御流罪も無い方がよいでないかと、屁理屈が出て來る。處が此の御流罪があるにあらざれば、淨

十真宗は開けて下さらぬ。既に『御傳鈔』御夢想の處で頂いて、爾の時善信夢中にありながら、御堂の正面にして東方をみれば、峨々たる岳山あり。その高山に、數千萬億の有情群集せりとみゆ。そのとき告命のごとく、此文のこゝろを、かの山に集れる有情に對して、説きさかしめ畢るとおぼえてゆめさめ畢ぬと云云。

と、淨土真宗興行に非常に御縁のある東國の地方である。然るに、若し此の御流罪が無ければ、聖人は此の有縁の地に於て下さる事もなく、隨つて稻田で『教行信證』御遷延の事も無く畢つて仕舞つたのである。爾るに此の御流罪があつたばかりに、久遠劫來の御因縁が時節到來して、淨土真宗は開けて下されたのである。

さて斯く申せば、信仰の無い方は、夫れは餘りに獨りよがりな事を言ふと言はれるかも知れぬ。之に就き先達て、或る御方が御子様を失なはれて、非常に歎いてお出でになる。私は平日お親しく願つて居る處より、其の御子様御出生の時、名をつけさせて頂いた御縁より、法名をもつけさせて貰ひ、葬式にも参らせて貰つた。さて棺を出したあとで、奥様としてみくお話させて貰うと、奥様は非常に悲まれて、兼ね御催促、御手廻はしといふ事は承はつて居たが、實に此度のことをはえらい御催促に遇せて貰つた」と言はれる。私其の御催促と言はれたのに氣を附けて、「如來の廣大なお慈悲は、さあ御催促であるから、之から信心を頂くのであると、頂くお慈悲を遠い處に置くのでは無い。金を返へせの御催促では無

くて、金を造らうの御催促なのである。自分の子供は淨土より還相回向て

彌陀觀音大勢至、大願の船に乗じてぞ、生死の海にうかみつゝ、有情をよばうてのせたまふ。

と、直き／＼使ひにお遣はし下され、さあ此の通り親は待つて居るぞとの直き／＼の御催促であれば、あゝ此の通り佛は待つて下さるのであるかと、其の御催促の聞えて下された其の時頂くのである」と申したら、奥様は様子を變へて喜び下された。あとで主人の方も其の席へお出になつた。此の方は人格の圓滿なる事、御僧分として御心がけの厚き事、實に稀なるお方であると、皆ながら言ふ程の方である。處が失禮ながら信仰上にも其處があつて、「此の時斯く頂くのぢや」、「斯くせんならぬ」と、露骨に申せば、修養風に力めてお出でになる處が見えるのである。此の時も言はるゝには「先き程も棺前で大經十二光の處を讀ませて貰うて、其れ衆生ありて、斯の光に遇ふ者は、三垢消滅し、身意柔軟にして歡喜踊躍し、善心焉に生ぜん。若し三塗勤苦の處に在りて、此の光明を見奉れば、皆な休息することを得て、復苦惱なけん。壽終りて後、皆な解脱を蒙る。

と、茲を讀ませて貰うた時、あゝ今度子供の死んだのも、此のお光明の現はれて下されたのぢや。お慈悲の光を見せて下されたのぢやと、氣がついて喜ばせて貰うた」と。此の時私はお歎きの中なるをも遠慮せず申上げた。「あなたは夫れは可かぬ、心は悲しくて仕やうが無いのに、夫れをお光明を以て蔽はんと仕て居らるのである。悲しは悲しいなれど。如來

のお慈悲は此の悲しい心に絹着せて喜ぶのでは無い。其の悲しむ其處を待ち兼ねて居ると言つて、下さるのでは無いか、其の悲しい其處が、彌々今度こそ其の心に頂くと、促がして下さる事實ではありませぬか」と。斯く申し上げたら、其方は俄に涙を流してお喜び下され、「あゝ長い間お待たせして、濟ませぬでした。實に此度びは難有い御縁に出あはせて貰つた。氣がついて見ると、今日迄長々申やう無き思ひ違えを仕て居たのである、實にすまなかつた。實は今日迄あなたが大草師の信仰のお話でも、成る程巧みに言つたものである、成る程あゝ言へばあゝいふ筋道になり、いや、應言へぬ言ひ方であると思ひて、眞に大草師が法の爲めに死なれた有難い方であるとは、思うて居無なかつたのであるが、實に濟まなかつた」と深くお喜び下された。今親鸞聖人が、延命でも御流罪でも、一として無意味に有るのでは無い、皆な斯の如く一々の御縁によりて、彌々お慈悲が顯はれて下さるのである。斯く言へば餘りに得手に都合好く申すやうなれど、聖人が御自身に仰せられてある通り。

大師聖人若し流刑に處せられ給はずは、我れ又配所に赴かんなや。もしわれ配所に赴むかざんば、何によつてか邊鄙の群類を化せん。是なを師教の恩致なり。

斯く一々の縁が、「縁として壞すること能はざるが故に」て流罪の縁を以ても、聖人の信仰を壞する事が出来ぬのみか、其の縁の爲めに益々無碍のお慈悲が現はれて下さるのである。之れが堅固願であります。

次ぎには「究竟願の故に」『述文贊』には

究竟願の故に、必ず果し遂ぐるが故に。と。之れは第二十の願に

設ひ我佛を得たらんに、十方の衆生我が各處を聞きて、念を我國に係けて、諸の徳本を植ゑ、至心に廻向して、我國に生れんと欲せん。果し遂げずは正覺を取らじ。

と仰せられてある、即ち阿彌陀佛の本願は、我々罪惡の者を最後迄助け、果し遂げずは正覺を取らぬとの、廣大の果遂の本願である。故に「必ず果し遂ぐるが故に」であります。世間の仕事をするにしても、九十九迄連んでも、最後の一つで投げ遣りして仕舞へば、今迄の九十九が一邊に皆な投げ遣りになり、駄目になつて仕舞ふのである。處が九十九迄成就しても、彌々左右の決するといふ最後の一つが、道連れも無くなり自分一人で、命がけて無ければ出来ぬやうな處、如來のお慈悲で引張つて頂いて無ければ迎も行けぬ處が出て來るのである。今彌陀の本願は、其の遣る瀬無き親心も、我々が惡趣に落つるを最後迄引き止め、遂に此者を助け遂げて下さる究竟願、と頂けば、實に申して見やうも無き廣大本願であります。

已上は『大經』の「無量壽佛の威神力の故に、本願力の故に満足願の故に、明了願の故に、堅固願の故に、究竟願の故に」といふお言葉を申したのであります。聖人は之を和讃にお示し下されて、

神力本願及満足 明了堅固究竟願

慈悲方便不思議なり 眞無量を歸命せよ。

斯く聖人の「和讃」には、御經の漢文を其儘すらくと書き

下されたものがあるのがある。茲に又味ひがあるのでありませ、今日は思ひ出す儘に、前後の秩序もなくお話致し、嘸御聞き苦しかつた事と思ひます。何卒御同様に此の盡十方無碍のお慈悲を充分に喜ばせて頂き度いものであります。南無阿彌陀佛々々々 三月十八日

和上曰く往生不定につき二の病氣がある。一には願力不思議とばき、ながら何かお土産をこしらへたいと思ふ心である。落付き度い安堵心になり度いの心切になり、法の御手許を聞受することが後になり、此心に價値をもたせ信心を認めんとする也。其心の方向を彼此にかへて、御助けの御手許を能く聞きなさい。自分で自分が往生の大事を氣にかけて心配するよりは五劫の間御心配ありつるものなと思ひ、自分で吾が胸ながめて早く落付心になりたいたいと、けはしく思ふより十劫正覺の曉天より、吾等の往生一定の時節を待ち望む玉ふ大悲の御心は、幾倍かにはしくやあらんと思ひ、俯して案じる心のむきをかへ、仰いで法の御手許を聞聞せよ。すれば何の疑ふ可きことがあらう。彌陀大悲の誓願を深く信ずる」とは、此の法の御手許のお力の無きを、其の如く眞受けになりたるにて、我心を深めて信ずるのては無いのぢや。二には往生を認めんと思ふ心先きになりて、本願を後にするの病あり。我等の信心は淨土に望めて起すて無い、本願に望めて安堵するのぢや。吾等は唯本願に乗ずればよい、往生は佛の方より願力の不思議として決定せしめ玉ふのである。云云。

〔七里和上言行録〕

事しんかふなす。

二

元來私の性質は、我儘一點張てございしますが、さりとて小心な方ですから思切つた事等一つも出来得る人間ではなかつたのであります、しかし一面頗る感情に駛せ易く、激すれば随分究飛な事も致しました。それに己惚が強く、おまけにしつこくて、世話すきてしたから、他人様を自分の思ふ様に仕度いと云ふ悪い心根なので御座います。

如此性質ですから、母の心配は一通ならず、小學校八年間家を出るときには「先生の仰をよく守れ、友達と喧嘩をするのでないよ」と訓へてくれましたが、私はそんな事は馬耳東風、散々横着をしまして、常音様等は大人しい方ですから、毎度私がお泣かせ致したものです。

それから小學校に奉職してからは「どこの親も子がかあいのほ同じだから、親切に教へて上げておくれ」と出勤前必ず申して聞かせました、又此時分私の同僚は、多く若手で遊廓等へも足踏する人のある事を探知し、母は私を膝下に呼んで廊遊びをすれば不治の病を得、且借金の出来る事等を實例によりて諭してくれました。それから又私か廊遊びをしないと見てからは、結婚には自分が妻を娶る資格ありや否や、女は自己の妻とし又井口家へ入るゝも差支なき者なりや否やの點を考へて、輕舉盲動をなさぬ様にと、毎度毎度注意してくれました、私が今日迄何とかかとか操行の保てたのは、偏に母の此心の賜で御座います。

告白

十年の同情者を失ひて 永劫の同情者を得たり

井口 乘海

一

やる瀬なき親心の前には、如何に此我儘な私も、とう／＼屈服させられました、淋しくて／＼堪えられなかつた此胸の中を、明けても暮れても開放せず、照して下さる御佛の御蔭により、嬉しき日暮をさせて頂く幸福至極な身とさせて頂いた事を、難有く感謝致します。

私は元來眞宗大谷派の末寺に生を享けまして、母の腹中より法を聴き、佛飯で育て、頂いた上に、父母は此上もなく御信心を喜んでおりましたので、明けくれ御佛の御慈悲にっかり乍ら、成長したので御座います。殊に又此度喜ばせて頂きます時の善智識たる近角先生の御寺とは同村で、僅かに三町計りしか距つて居ないのでございすし、先生の御令弟の常音様とは同年で、寺同志ですから、幼少の時から御友達で御座います、かく迄も御手厚い親心とも知らず、今迄御待たせしたかと思へば、何とも申譯なくて泣かすには居られません、然しこんな邪見な私を、餘計に可愛いと仰、あゝ難有い

三

私の寺はまことに小さく、門徒教導女では生活に差支へますので、私の父は「説教者」として出てゐましたが、父母は無論私を僧侶にする積てありましたが、自分も左様考へて説教の稽古等一心に努めました、何分小寺で貧乏である爲めに人に侮らるゝのと、且父が他より歸るとすぐ謝禮を佛前に供へ、「法を賣つて生活する事の勿體なや」と日頃懺悔するのを見て自分も「かく法を賣るのは嫌だ、それよりか他の職業を仕度い」と考へてゐました。

兄も此問題の爲めに、既に僧侶にならぬと決心してゐましたし、私の考も定まらぬので、母も此點には頗る案じまして、遂に私を村の小學校に奉職させ、一方住職させて、生活と門徒教導とを兩立せしめようとしたのであります。

四

かくて私は小學校卒業後、小學校に奉職しましたが、師範入學の希望も學資の一條により達し得ず、仕方なしに私は學校奉職後少しづつ貯へておいた金を以て、師範校の講習科と云ふ速成所へ入學しました。業を卒へて飯りますと私の弟は小學校を卒業しました。私は嬉しく、兄に「自分等は秩序的に教育を受けなかつたから、此弟丈は順序追ふて勉強させた」と相談しましたが、兄は一向取合つてくれませんでした、私は父母の許を受け、私一人て弟を中學へ入れました。僅かの給料で弟の學資に半分以上を送り、私が生活して且幾分の

貯蓄をしましたので、随分苦しく御座いました。其中に日露戦役は始まり、私も召集せられました、多数の可愛い児童と別れて行くさへ苦しいのに、愛弟の學資杜絶と云ふ一條は、私を半狂の態で煩悶せしめました、然し國家危急の場合致方なく應召しましたが、弟へは當分私の貯へにより學校を續けさせ、正可の場合家屋を賣拂つても退學させぬと決心しました。

入隊後暫らくしてから、師團軍醫部につとめる事となりましたが、弟の方へは軍隊より支給される、給料は勿論、上官の方が時々心付けて下さる御金をも送つて、漸く學校を續けさせておきました。其年の十一月母は感冒が元で肺炎を起し遂に死去しました、母の屍骸を火葬に付するときは、「母をまさずば此世に生き残るとも何の甲斐もなし、一層共に死するに然かず」と私は體を炎の中へ投しかけた事が、幾度か御座いました。然し母は病中一點の悶えなく、愚痴なく、御念佛以外唯感謝の言葉のみであつたさうです。殊に私については「あれがあるから此家も何とか方法をつけるだらう」と申したとの事です、又私が應召後信仰問題に氣を向けてゐる事を承知してゐたので、此點に於ても安心してゐたのであります。

五

除隊後大阪市の小學校へ奉職しましたが、兄も會社へ出てゐますので一緒に暮す事となりました。元來私の兄は私とは性質が全然相反して居ますので、いつも意見が合ひません。殊に僧侶にならぬと決して早くより家を出て、父母を怒めると、私は都合によりて、九茂病院を出て、専心勉強にとりかゝりました。

私は大阪在職中、弟が三四年間の學資と思つて多少の貯蓄をなし、知人に預けて置きました所、知人に不幸が生じまして不意となりました。十月に入つて弟は赤痢症にかゝりて入院いたしました、如何なる日も思出さぬ事なき可愛い弟の大病。上京後重ね／＼の不幸には私も何ともして見ようもなく甚たしく煩悶致しました。

しかし今私が悲觀してゐては、自己と弟とは糊口を凌ぐ事も出来ぬのですから、何か仕事を見付けねばならず、さりとて二人の生計を支へるには、非常の苦心を致しましたが、仕事の如何を問はず、無茶苦茶に働きましたので、今日迄漸く支え得たのであります。そうして自分では「如何なる難關でも切抜けてゆく」と甚だしく己惚れてゐました。

かゝる境遇になりましたから、上京の本旨たる信仰問題は全く忘れてしまつて、唯物質界の事のみ汲々として居ました。が、先生には時々「お前は一體東京へ何しに來たのか」と叱られ、丸茂の奥様にも不絶御注意を受け乍ら、「パンの問題に迫られてゐては法を聞くなんか出来ませぬよ、先成功してからユツクリ承はりませう」と嘯いて、遂には先生は大嫌ひとなり、丸茂の奥様は五月蠅くなりましたが、それでも私を少しも見放さずに護持養育して下さつた奥様の御恩は海とも山ともたとへ様がありません。

六

うともせず、且弟の事など少しも見てくれません。かく井口家に對し、父母兄弟に對し、長男としての務をせず居乍ら兄貴顔して威張るので、私は癪に障つて堪りません。然し何とかして其心を矯め、尙私から見れば兄の働きのない事が目だるので、大に鞭撻してやる積りて同居したのですが、僅か一ヶ年に充たずして、とう／＼喧嘩別れをしてしまつたのであります。

其後兄は他家へ養子に參りましたが、今迄私の心が解けませんので、絶交の有様で御座います。

かく兄が當になりませんから、一層弟を勵ましたましたが、其中に弟は中學校を卒業致しまして、高等學校に入りました。その入學試験につきましては、私は無論心配致しましたが、父も餘程案じてくれたと見えまして、愈々弟が入學しましたら、其喜び方は一通りはなかつたさうです。二週間計り經て突然、卒中症を發して倒れました。私は大阪から日曜毎に飯郷して見舞つてゐましたが、病氣は一時停止した様でしたから、明治四十二年一月教職を辭して愈上京致しました。

倍て私の上京の理由は第一信仰問題の解決、第二醫學研究の二つてありました。即ち私は母が死しましてから、胸中何とも云へぬ淋しき感を持ち、不絶何物かの同情を求めて得られず、又今父の病氣を目の前に見て、愈信仰の解決を急ぎ、且醫學をも研究したいとの考から、常音様に其旨を通じ、先生の御指圖により、丸茂の奥様に托せらるゝ様になりて、上京後直ちに丸茂病院において頂きました。

上京後まだ一ヶ月も経ぬ間に父は死去しました、暫らくす

前に申しました通り、私の境遇はとかく變化の多い方で御座いました。母の生存中は此も慈悲深き母の同情の下に、如何なる苦しみも打忘れて、働いてゐたのであります。母が死しましてからは、是に代るべき愛を他に求めようとしてあせつたのであります。

所が私は故郷の學校に奉職してゐた時分から、格別に世話した一人の教へ子がありました、一家の人、特に其母なる人は私を深く愛してくれましたので、私も其愛に絆され出入してゐました。私の一家の者も交際してゐました。其後に互に遠く離れ勝てしたが、書信の往復は勿論一年に一度は必ず何れよりか寄つて、親身も管ならざる間柄となつてゐました。四五年する中に其子供も追々成長し、母なる人よりそれとなく將來の事共語り聞かされたので、二人の間默契が成立したのであります。其後殊に母の死後何者かの愛を求めてゐる私には彼女の愛は總ての原動力となつて苦戰奮闘を續けたのであります。彼は熱心なる基督教信者でありました爲め、私は彼に勧められて、盛に教會堂へ出入した事すらあつたので御座います。所が彼女は一昨秋神經衰弱に罹りましたので、私は色々慰めもし、遂には彼女の爲めに茶を廢して、彼が健康を祈つたのであります。彼は其時の私の好意を謝し、昨年一月己が意中を打明けて越しましたので、私は愈彼女を信じました。彼はやがて兄なる人の轉任に従ひ、上京して専門教育を受くる様になりました。夏に入つて弟は希望通、東京醫科大學へ參りますし、私は愛する二人と共に當地に暮す事となりて、一時は常規を逸せん計り有頂天になつたのであります。

然るに昨年十月頃より、何となく彼女の母の私に對する様子が一變し、其後附に落ちぬ事計りなもので、私は歳末の頃より此問題の爲めに煩悶する様になりましたが、尙私の心の中には、どうしても本人のみは疑ふ事が出来ませんでした。

七

如此悶え乍ら尙信仰を求むる心はなく、或時不圖考へますと、私の知つてゐる範圍内でも、總て無理非道な事をして金儲けた人の子はどうも出来がよくないと思ひ、それが氣に懸るので、丸茂の奥様に「私も東京へ来てから随分其場限りの事を云つて金を得ましたから、成功したら慈善事業をやつて罪滅しをしませう」と申しますと、奥様は「念佛者は無碍の一道也、慈善事業よりも御信心を頂きなさい」と戒められました。

又一月廿七日に前本氏の所へ参りましたら、前本氏は「九段へ一緒に参らう」と勧められます、私は「先生の話は御免だ」と断りましたが、聞かれませんでしたので「牛に引かれて善光寺参りかな」といつて御供しました。

所が二月四日に丸茂様へ伺ひまして、其日の求道講話の御取次をして頂きましたが、大草師の事を承つて「自分も其極道息子と同じ事だ、して見ると此方の考がセツバつまつて得るのではない、親心得得ても頂くのかな、そんなら自分も（一心になれる私でも）入信が出来るかしらぬ」と其夜は大層感に打たれて歸りました。

七日に又丸茂様へ伺ひましたら、奥様が「大層心配事があ

るさうだが自分に任せぬか」との仰でした、私は非常に難有く、萬事の解決を御願し引受けて頂きました。

八

九日弟が彼女の家へ行き、彼女の母の様子を見て参つてからは、私の煩悶は其極に達し、其夜も眠られず、翌日も益々苦しいので、土曜日幸ひ、九段へ参詣しました、講話は「絶對の信と相對の信」と云ふので御座いましたが、其講話は私の胸の中を刺さるゝ心地して「先生は今日は私の爲に話して下さつたのだ」と思つて泣けて／＼始終聴聞しました。後に承れば「相對の信」とは基督教の信仰を指して御述べ下さつたものだがうですが、それが私の現在の胸中を指摘された様に思ひましたのを見て、私は一時全く基督的になつてゐた事だらうと、今更慚愧に堪えません。

十一日には求道學舎や、大草師の追弔會に参りましたが、どうも満足が出来ません、夜丸茂様と奥様と小出様とに色々聞かせて頂きましたが、小出様の御話の中に、國木田獨歩氏が臨終に苦悶せられた時、牧師が「祈りなさい救はれますよ」と申しましたら、氏は「此祈りえぬ心を知りて救つてくれる神はないか」と申された。

との御話で御座いました。私は此話が大變難有く「自分の此苦しみも面目なくて誰にも云ふ譯に行かぬが、此苦しい胸の中を知つて救つてくれる人はないか」と求めたのであります又小出様は「入信の経路」を御讀みなさい、と仰せられました、私は「先生の御話さへ承ればよい、書物なんか讀みたくと泣いて下さる。私は悶えて部室中を爪尖立て、歩き廻り、手を噛み切り、死なんと考へて逃さうとしたら、奥様は「今日日はあなたの母様の代理ですよ、出て行くなら私を引磨つて行きなさい」と堅く捕へて放して下さりません、私も母の聲には今更抗する譯にも行かず、只豫て打合せてあつた爲め弟も萬一の用心にと参つてゐましたので、逃げとほす事もならず「何とか救はるゝ者なら助かりたい」との一念は苦しき中にも色々書物を読みましたが何も解らず、唯嘆異鈔中の娑婆の縁つきて、力なくして了るときに、彼土へは参るべきなり。

煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、萬の事皆もてそらことたはこと、まことあることなきに、唯念佛のみぞ誠にておはしますとこそ仰候ひしか。

の御文のみ難有く讀ませて頂いておました。午後一時過、奥様に連れられ、九段へ参る時、いや／＼乍ら不得止電車に乗りましたら、可憎若い婦人が澤山乗合せてゐられました「この様に外面女菩薩でも内心夜叉だなどと思つたら、厭で／＼堪えられず、又其夜又が皆私の顔をじろ／＼ながめる様な氣がして、それこそつらう御座いました。

九段へ着きまして講話を承りましたが一つも分りません講話後先生が「井口君どうだ、丸茂さん少しは分つた様ですか」と尋ねて下さいました。奥様は「非常に苦しんでおられます未だ聞けません」と御答へになりましたら、先生は「佛様はお前の様な不具者が可愛想だと仰せられるのに、井口君は私は不具者になりたくない」と云つて逃げてゐるのだから、

ありません」とすげなく御断りしたのですが、小出様は翌日強いて御送下さつたのです、それが又後に喜ばせて頂きます強い御手引となつて下さつたので、皆様の御親切には、今更御禮の申様もありません。

十一日から先生の御話が承はりたくて、度々御宅へ参りましたが、先生は三教會同問題でいつも御不在「三教會同問題も大事だらうが、私が苦しんでゐるのに早く歸つて下さつてもよからうなど先生をうらんだ事さへありました。其後三三度聞かせて頂きましたが、先生は女心など少しも當にならぬ事を懇々御諭し下さつたが一向安心が出来ませんでした。

丸茂の奥様は、先方へ交渉して色々御骨折下さつたが、此問題は遂に不調に了つたのであります。

九

十七日朝御通知により丸茂様へ伺ひました、奥様は早速親鸞上人全集を出して二河白道の御話をして下さいましたので聴聞してゐますと、突然「井口さん、今日は死刑の宣告ですよ」と云はれました、私はどこ迄も彼女を信じてゐますので霹靂一聲驚きはしましたが到底信じられません「先生や常音様や奥様が、私を入信さすつもりの方策だ」と思つてゐましたが、奥様の様子が本統らしくもあり、心の中は口惜しささと怒りと疑の心が入り亂れて苦しさ申様もなく「奥様本統ですか」と刺かるゝ思つて反問しました。

此日の奥様は格別同情ある言葉で「本統ですよ、あなたは永い間母なる人に玩具にされてゐたのですよ、可愛さうに」

少しも難有くないです、駄目です〜」と私を叱りつけ、更に丸茂さん、井口は甘へる癖があつて、餘り愛して下さると佛様よりもあなたの方が難有いのですから、どうか少し突放して下さい」と云はれましたが、其顔付の如何にも私が憎くさうに、根性の悪い云ひ方と云ふたら、一通ではなかつたので、私は心の中に「今度こそは奥様に倚りかかつては居ないのに、あれ程に云はんでもよい、少しも同情のない人だ」と頗る強くうらんだのであります。

夫からと云ふものは、先生が不具者になりたくなくて逃げると云はれたことは、即ち罪惡觀がないとの事だ、私が求めて得られぬのは、もう此一點だ、何故自分は罪惡觀がないのだらうかと、茲に煩悶は尙一つを増加したのであります。歸途電車の中から又「入信の経路」を読み初めまして、鈴木君は如何にして罪惡觀を作られたかを調べました。同君も初めは罪惡觀のなかりし爲めに、苦しんで居られる所は、私の現在と全く同一だ、然るに同君はいつの間にか罪惡觀を起して、獲信してゐられる、其一轉化がどうしても私に分らぬ。奥様の御宅へ歸つてからでも、この一點のみ苦になつて困る。然し何だか苦しい中に「自分は必ず救つて頂ける」との考が強く嘆息、懺悔録、入信の経路を讀みつゝ、今分るので、今だ、此一頁中だ、此一行中に得られるのだ」等と肩を張り、齒を噛み、拳には汗を握りて求めました。

夜に入りまして、弟に彼女の寫眞を持たせて寄こして、したゝかに叩きつけると共に弟をも叱り飛ばしました、誰よりも一番可愛い弟も、此時計りは「貴様もおれに反旗を擧げたな」

様子から「僅かに残りし望さへも愈々いけならしい」と思ふなり、もう此世に於ける總てのもの、今は悉く破壊されて所謂「取付島もない者」となつたのであります。此時私は「今日はどうか一心に聞かせて下さい、私今度得させて貰はなければとても此井口は立ち行きません、そうしていつも先生やあなたに聞かせて頂くと、立板に水で私が考へる暇がない、それで今日は常音様が御話下さる、私は分らぬ様になつたら次の室へ引込んで考へる、考がついたら又聞かせて頂くと云ふ形式に御願したい」と注文しましたら、常音様は「夫はどうなりと御勝手ですが、然し君自分の頭で考へてゐては一代かがつても解決はつきませんよ」と仰せられました。

又其席に塚原君も御出になつて「御慈悲は此方で考へる様な小さなものでなく、又此方でよい加減に想像して方角違ひに考へたりしてるとは勿體ない事ですよ」と申され、同君の如何にも嬉しうな様子、言葉に表しえぬ難有さうな風を見て「私が考へる〜と云ふてゐたのは自力の修行だな、自力の修行のとても塚の明かぬ事は幼少の時から承つて居ながら何と濟まぬ事を思つてゐたのたらう」と氣付かせて頂きました。

それから又私は「常音様、先生は私に罪惡觀がないと仰せられる、私は罪惡觀は起らぬ、どうしたらよいのでせう」と申しますと、常音様は

自分で眞の罪惡觀が起るのですか君、監獄の囚人を見給へ、死刑の宣告を受けてゐても「自分は悪い事をした、しかしあの時の事情止むを得なかつたのだ、又相手も悪

とやつたのであります。

夜遅く奥様はお休みになるとき「私はどうして罪惡觀が起らぬ、佛様が分らぬ、どうしたらよいのですか」と御尋ねしたら、奥様は「まあ明朝先生に伺つた方がよろしいでせう」と申されました、私はこれ程便りにしてゐる奥様さへ駄目なのだと諦めざるを得なかつたのであります。

夫から皆さんは休まれる、私は讀んでも〜別らぬ、午後一時過床に入りましたが、さあ〜過去十年間の歴史を回顧し、殊に彼女に對し「こらもしたあ〜もした」と追憶順次に湧いて夜を徹したのであります。

10

十八日求道學舎へ講話に參詣しました、昨日とは違ひ難有拜聴しましたが、不轉變苦になるは罪惡觀の一條、心の中には「佛様は此儘救ふとの勅命なれば、不具者になるのがいやでも助けて下さればよいに」と考へてゐました、實に今から思出すとどこ迄も〜佛様を玩具にしてゐた事を深く耻入ります。

講話後丸茂家へ歸り、午後又常音様の所へ伺ひました、昨日奥様より宣告を受けてから、先生には突放され、弟さへも便りにならずと諦め、尙奥様をも駄目だとして、最早自分は佛様にすがり外はないと考へながら、尙彼女の意中を疑ひ得ずして、常音様に逢つたら其邊の消息も眞實の所が知り得らるゝだらうとの念が残つてゐました。然るに常音様は私の顔を見て「井口君どうです」と御尋ね下つた時、常音様の御

いのだ」と然し付の罪惡觀である。

君は今罪惡觀が起らぬから、夫を起さうと努めてゐるけれども、どうして自分でそんな物が起るものか、そんなに努めてさへ罪惡觀一つ起らぬ此奴なればこそ佛はそれを可愛さうだと仰せらるゝのぢやないか、起らぬ心は起らぬてもよい、御佛の研究をし、こちらの心を探査して頂く信ぢやないよ、唯親の慈悲を眞受する計りだ、親鸞におきては唯念佛して彌陀に助けられまゐらすべしと、

よき人の仰を蒙りて信ずる外に別の仔細なきなり云々と仰せ下さつたとき、私は何となく、フーとした心持になりました、恰も水底に沈んで居た體の浮上りし如く、堅くなりぬし體は俄に柔くなりし心地して、嗚呼今日迄求め探して居た同情者は此佛様であつたか、確かな永劫不變の同情者は此如来様であつたか、この様に近い所に、然も先手をかけて待つてゐて下さつたのであつたかと、氣付かせて頂いて見れば、今迄人を同情なしと怨んだ事や、今迄考へ來り爲し來りし事の間違計りであつたので、茲に感謝と慚愧とに胸は充ち〜御念佛を申しましたと、常音様も塚原君も共に喜んで下さいました。

11

當日は求道發送の日でしたから、早速手傳つてくれとの仰で、仕事をさせて頂きましたが、今迄沈み切つてゐた私の胸の中は俄かに賑に、何が何だか分らぬども嬉しくて〜愉快の極でした。今日迄の事はそらごとたはごとまことあること

なきに、唯念佛のみぞ誠にておはしまする、唯獨り御念佛が
出て下さる。茶絶ち菓子絶ちして祈りをなして居た事の、實
に誤りであつた、無意味であつたと知つて見れば、早速頂き
初めました。好きな物を永く廢してゐた事故、ぐまぐまもあつ
たのでせうが、かく氣付かせて頂いた御恵みの程を思出させ
て貰へば、一杯の茶、一個の菓子も亦云ひ得ぬ味ひで御座い
ました。先生が常々、實驗、實驗の宗教、信仰の實驗と仰せ
らるる御言葉の今更うなつかれて、信仰の妙味を今日初めて
味はせて頂くのかと、つくづく我身の幸福を喜びました。

自分はえらい、働きがある。熱心と誠實とは自分の特長で
ある、如何なる難關にても切抜けてゆく。人は自分をやり手
だと感心してゐるなどと、非道く己惚れてゐた事の耻かしく
又人に對して同情あり、世話好きなりと信じぬし事も、皆眞
の同情でなくて、其裏面には必ず我利我利主義の潜んでゐた
事のあざまじさ。

今迄兄と私との不和については、兄かどこ〜迄も悪しく
私は一點非難される様な事はないとのみ思つておました、近
角先生は二人の不和に就ては一通ならず苦心して下さつて、
私へ御諭しの時には此話の出ぬ事はなかつたのです。しかし
先生はいつも兄に肩を持たれると思ひ「例令信仰を頂いても
此問題文は兄様が悪いのだから除外例として頭を下げてお
かう」と決心して居ましたが、今となつては兄様に濟まず、こ
んなに弟が我慢張つてはいかな兄様もさうは折れられなんだ
であらう、又例令兄様の井口家に對し、弟に對する仕打がよ
くないにしても、それは其人の性質、境遇、思想がさうすべ

雜 錄

至心廻向の意義

近角常觀

此の度び私が石見に参りて、多くの人が驚きを立て、お喜
び下された事は實に著しき様であつた。何故此のやうに多く
の方がお喜び下されたかといふに、それは唯一ヶ所である。其
の一ヶ所が實に信心上大切なる處故、其の點を初めに話し、
夫れより漸次私が近頃喜ばせて貰つて居る阿彌陀佛御本願の
至心信樂欲生の三倍に就き、お話致さうと思ひます。

二

さて其のやうに石見の國の方が著しく際を立て、お慈悲を
喜ばれた其の點は何處であるか、と申すに、今申す如く唯一
點である。夫れは何處かと申すに、佛が私共を助け救ふて下
さる、可哀がつて下さる、哀れんで下さるといふ事は、皆な
一應聞いて居らるるのであるけれども、其の佛の助けて下さ
る、哀れんで下さる、といふ事が軽く受けられて居る。阿
彌陀佛が超世無上の本願を起し、五劫兆載永劫の深き御心配
を私共の爲にして下された。といふ肝腎の處を皆な聞落して
居るのである。之れが此度び石見の多くの人が、驚きを立て
られた點である。

き様になつて居るので即ち業報なので、自分でもかかる業報
があれば必ずさうしたに違ひない、さすれば決して兄様を攻
めるべきものでなかつた」と氣付かせて頂きました。思はず
知らず「兄の事文は除外例にする積であつたけれども」と口
走つて皆様に笑はれたのであります。

私は父母を亡ひて孤兒だと思つておましたが、此度近角先
生は父に代り、丸茂の奥様は母に代り、かゝる幸福を得せし
めて下さつたのであります。煩悶中自殺して地獄に落ちるか
生きてゐてもヤケを起し、墮落すべき運命を有して居た私も
「行け〜」と勸むる母もあり、「來れ〜」と呼ぶ父もありま
して、「汝一心正念にして直に來れ、我能く汝を護らん」との
勅命に救はれたのであります。

過去の事、殊に此間中の事を思ひ出す度毎に、
大聖おの〜もろとも、凡愚底下の罪人を、逆惡漏さぬ
誓願に、方便引入せしめけり。

彼女も今となりては善智識で御座います。彼女の同情は失ひ
ましたが、今は何處へでもついて來て、何時でも離れず、決
して見放し給はぬ御手丈夫な同情者を得まして、安々と勉強
させて頂きます。亡き父母も定めし満足してくれてせう、
軀ては慕はしい母と一緒の所、親様の懐へ引取つて頂きます
いやな〜先生も、此頃は大好きになりまして、御講話を
聴聞し、不相違御引立を願ふてゐます。

南無阿彌陀佛……………

三

之れは必ずしも石見の人ばかりに限らぬ。誰しも佛のお救
ひ、お助けてある事を知らぬ人は無く、佛が悪人を助けんと
の仰せてある事は、皆な聞いて知つて居らる、けれども肝
腎の佛の遣る瀬無き所を頂かぬからして、其のお助けお救ひ
が軽ろき事になつて仕舞つてある。先づ誰しも前に申さる、
に「如來は此の淺間しき者をお助け下さる、此の横着の者を
哀れみお救ひ下さるのである」と、之丈は誰方でも皆な言
はれるのである。而して眞に此の横着の者を、此の淺間しき
者をと頂けてあるかといふに、頂けて居無いのである。

四

殊に今度石見の國の人の多く驚かれしは、私が多くの人に
申したに、「成る程あなたは其のやうに喜ばるゝが、如來の慈
悲は其のやうな輕き事にあらず、佛の哀れ、不愍と思召し下
さるは、我々の思ふ如き一應二應の事では無い。先づあなた
が一家の中で暮さるゝ時、人に隔つる心起り人に不足の思ひ
が有るであらう。其の胸中の人を疑ひ、隔て、不足に思ふ根
性は、之を人にも告げられず、心で獨り苦んで居るのであら
う。今大悲の親様が助けるとの仰せは、我々が一應悪いから
助けるとの仰せては無い。我々の胸中に、斯く人を疑ひ、隔
て、憎み、突き落す悪しき心がありて苦しんで居る、其の根
性を大悲の佛は能く御承知下され、其の如何にしても悪心の
止まぬ、淺間しき處を御承知下され、其の悪しき心の止まぬ
のが可哀いと、言て下さるのが大悲の親のお心である。言ひ
換へると、外の胸中には此の隔て心があるであらう、我は其

の隔て心の有る事を能く知つて居る。汝の心には斯うの
貪瞋煩惱が起るであらう、我は能く夫れを知つて居る。其の
疑ひ、隔ての心を取り度いと迄は思ふて有らうも、其の無く
仕度の心を如何にしても無くなせぬて有らう、我は夫をも能
く知つて居ると、私の心の底迄知し召し下され、其の悪しき
心を起し、人を疑ひ隔て居るのが、如何にも不慥て見捨て
られぬと、斯く遣る瀬無く思召し下されるのである」と、此の一
ヶ所である。茲が最も肝腎であります。

五

大抵の人が頂いて居らるゝのは、「斯くの如き悪しき心があ
りても、佛は助けて下さるのだ」と、頂いて居らるゝもの故、
其の悪しき心は悪しき心でいつ迄も残り、お助けはお助けて
別々になり仕舞ふてある。而して其の悪しき心の止まぬのが
哀れ、見捨てられぬとある廣大のお慈悲なる事に氣が就か
ぬ人が多いのである。私は今度石見に参りて多くの人に話
した。多くの人が、お慈悲が有難い、恵みが有難い、と喜ん
て居らるゝのであるも、此の胸中の止むに止まぬ悪しき根性
夫れが大悲の涙のともなる事に氣が附いて居無なかつた。

六

二三の例を申せば、或人は此の世は當てにならぬ、我々が
思ひと思ふ事に、一つも善い事は無い、我々が有難いと思ふ
のも當てにならぬ、と唯當てにならぬと言ひて、夫れが
信仰であると思ふて居られた。夫れで私は申した。「唯當てに
ならぬと言つて居る丈けては仕様が無いではないか、其の當て
にならぬ者を、お見捨て無いのが、廣大のお慈悲で無いか」と。

られぬ、との仰せなのである。此の仰せに氣附くなり、なが
く夫程迄の遣る瀬無く御親切なりしかと初めて我々の不
まり果てる外無くなるのである。

九

今度石見では色々の場合が有り、氣の附く人多かつたが、こ
ぐちはたから故、一々に言ふ事も出来ませぬ。が一言に言ふ
と、多くの人の言はるゝには「佛のお慈悲は申さんやうも無き
御慈悲でムります」と。夫れも言ひやうにもよるが、中には「申
さんやうも無きお慈悲でムります」と、言はるゝ人もあつ
た。之では佛のお慈悲の貴い事は能く聞いてあるが、何と無
く其のお慈悲が有り餘るお慈悲の如く聞こえ、有るが上にも
又重ねて、餘分にお慈悲頂くやうに思はれる。之れではまだ
眞のお慈悲が頂けたのでは無い。

十

全體阿彌陀佛の五劫永劫の御苦勞、十劫以來の御待ち兼ね
といふ事は、有るが上にも余分になし下されたお慈悲では無
い。五劫兆載永劫の長の御苦勞、一念一行と雖、有り餘る事を
なし下されては無いのである。夫れは皆な私の胸中に、足ら
ぬ處缺くる處があり、淺間しく佛の御胸を泣かしめ奉るもの
が有るばかりに、大悲の親様が御苦勞下されたのである。す
れば我々の、其の仕て見やうなき胸中を、親様の御覽下され
た處が、實に大悲本願の根源なのである。

十一

之を『歎異鈔』の示して頂けば、第九章に、

地方に行つた時、殊に申すは茲である。

七

地方に行つた時最も多いは、自分はお慈悲頂いてるから自
分は正しいと思ひ、自分は正しいが、家の者なり世間の者な
りが、夫れを認めて呉れぬ故、人に對し不足の思ひが起る、
併し自分はお慈悲頂いてるから、人を悪しく思つてはならぬ
と諦め、じつと我慢して、此の世はいつ迄も斯うだと思ひ、
喜ばせて貰つて居るといふ人が一番多いのである。之れは未
だ眞に頂けて居無いのである。

八

我々は自分が正しいのでは無い。第一斯く人を隔て不足に
思へるといふが、既に頼む可らざる者を頼みにし居るからな
のである。人よりも自分が善くしてるといふ考で人に向ふか
ら、人よりも其の心で向はれるのである。處が其の五分々々
の淺間しき私の心を御覽下され、其の五分々々の止まぬ根性
をお見抜き下され、其の人を隔て不平の止まぬ五分々々の根
性が可哀想で仕様が無いと、私が隔てれば隔てる程益々哀れ
み下さる廣大の親心、佛の大悲である。此の佛の御まことに
遇へばこそ、今迄人を隔て煩悶して居た私の胸中に、あゝ有
難や、此の淺間しき仕て見やう無き私に、其廣大の御親切な
る思召なりしかと、此の至り届いて下さる一念に、如何にも
申譯無かりしと頭が下るのである。茲が肝腎である。我々の
方は如何程努めても、此の隔て心は去らず、疑ひは取れず、
五分々々の根性は止まぬ。其の止まぬ胸中を御覽下され、汝
の惱むは茲て有らう、あゝであらう、夫れが可哀相て見て居

天におどり地におどるほどに、喜ぶべきことを喜ばぬにて
いよゝ往生は一定と思ひたまふべきなり。よろこぶ可き
心をあさへて喜ばせざるは煩惱の所爲なり。しかるに佛か
ねて知し召して、煩惱具足の凡夫と仰せられたることなれ
ば、他力の悲願はかくの如きの我等が爲めなりけり。云云。
「佛かねて知し召して」とある、之である。私の胸中に、人を隔
て、誹り、怒り、ねたみ有りとする悪しき心が充ち満ちて、之を
止めれば可い、善くすれば可いとは知れども、止められず善く
出来ぬ、其の爲め無量永劫迷ふて居る其の私の胸中を佛兼ね
て知召して、汝の其の胸中が不慥である、佛が涙を絞らせ
られた。其處が大悲の根源なのである。

十二

其處で此の者を如何にして助けるかと、之れより廣大の御
苦勞がある。此が我々の想像の及ぶ如き一通りの事に非ず。先
きにも申す如く、五劫の思惟といふも永劫の修行といふも、有
り餘る御苦勞は一つも無い。畢竟するに、皆な是れ私の胸中
に、夫れ程迄に大悲の佛を泣かし奉る淺間しき惡業が充ち満
ちてあるからである。『歎異鈔』には宣はく

彌陀の五劫思惟の願を案ずれば、親鸞一人がために候ひ
けり。さればそくばくの業をもちける身にありけるを、
助けんとおぼしたちける本願の忝けなきよ。云云。

十三

夫れ故、佛のお慈悲は有り餘つて、申さんやう無きお慈悲
でムります。がては、お慈悲に無駄が出て來るのである。今申
す如く、佛の御苦勞に私に無駄なるものとは一つも無い、

皆な私が悪いばかりに長々苦しめ奉つたのである。而して此の遣る瀬無き慈悲と聞く一念に「彌陀の五劫思惟の願は親鸞一人のためなりけり、さればそくばくの業を……かたじけなさよ」佛かねて知し召して……他方の悲願は斯くの如きの我等がためなりけり。此の業の深き此のやうの者を御見捨て無き慈悲であつたか、此の淺間しき私なればこそ、夫程の御苦勞で有つたかと頂かせて貰はれるのである。

十四

猶ほ分りよく申せば、我々の淺間しき根性は、「之を打出し人に話せば人が呆れるだらう」と一面自分の淺間しく仕て見やうなきを歎きつゝ、猶ほ他の一面には自分を善いと思ひ、人が自分を善く思つて呉れぬ故、人に斯かる事話す事出来ぬなど、悪しき根性を持つて居るのである。然らば人より、汝は善い悪しく無いと言はれて安心出来るかといふに否、彼れはまだ自分の本心を知ら無い、自分は彼を欺いて居るのであると、悔む。然らば人より汝は善く無いと言はれて安心が着くかといふに、又見捨てられたので無きかと心配する。斯く人の心は、自分が悪いと惱み悲むかと思ふと、又他より悪しく言はれば不足の念が起るのである。之れが互ひの心中である。

十五

今大悲の佛の見て下さるは、互の此の心の中を見て下さるのである。而して「如何にも其の悪しき心が絶えぬであらう、其の悪るい汝を、悪いからとて親は捨てて居るのでは無い、悪るいからこそ、彌々其の者を教はずには居られぬのであるぞ」と呼び詰めに仕て、下さるのである。もとより、自分の

子が悪しくてもよい、病氣でもよい、不具てもよい、道樂ても可いといふ親は世間に一人も無けれども、如何せん子供は今既に、病氣であり、不具であり、道樂である。此の時親の思ひは如何に。子供が悪くて可い、といふ事は一つも無けれども、其仕てならぬ事をする奴故、彌々親は大悲の涙を流し、ちつとして居られぬ。我々の其の淺間しき悪しき有様を、佛兼ねて知し召し、其の煩惱具足の凡夫であるのが可哀相で見居られぬ、悪しき心の止まぬのが哀れて仕方が無いと、之れが五劫永劫の本願のものである。若し唯一應の御救ひ、お助けて助かる者なら、一切諸佛は皆な夫れである。何も特に阿彌陀佛の御救ひを要せぬのである。處が我々は一切諸佛の大悲を以てしても逆も助からぬ奴、ぢやによつて其の助からぬのが可哀相である、若し助かる便りの有る奴ならば、捨て、置いても善けれども、助る見込の絶え果てた奴故彌々見捨て、は置けぬと、これより現はれ下されし五劫永劫の御苦勞である。言ひ換へれば、即ち私が悪いばかりに、長々親様に其の御苦勞をさせしたのである。而して是を頂いた處が一念歸命の信心であります。

十六

其處で、我々は五劫の思惟永劫の修行といふ事も昔から聞いて居た。十劫以來のお待ち兼ねといふ事も疾うから聞いた居たが、其の五劫永劫の御苦勞、十劫以來の御待ち兼ねといふ事は、誰がさせ仕たのであつたか、皆な私の此の悪しき根性の爲めにさせ仕たのであつた。夫にも係はらず、佛は此の私をお見捨てなく今日今時迄今か〜と、呼びかけ待ち詰

めにして下されし其の遣る瀬無き佛のお心であつたか。其の汝の爲めに親は是程心配し、是程手だてして待ち兼ねて居るのぢやどとの、其の遣る瀬無き親の御心であつたかと、茲の處を頂かせて貰へば、今の今迄夫程の慈悲とも思はず、唯佛のお慈悲は有難いて、一通りに聞き流して居た者が、あゝ此の悪しき心の爲めに夫れ程迄に御心配を掛けたのであつたかと、此の一念に頂かせて貰はれるのである。常に申す娘捨山の喩で申せば、彌々峠に達し、親を捨て、歸らうとする時、親が子供を呼び止めて、「我は汝に別れる覺悟ぢやが、汝の行く先きを心配して道々道しるべを仕て置いてやつたから、夫れを辿つて間違はずに歸れ」と言はれた、其一念に「あゝ夫れ程迄の親心であつたか、實に申譯なかつた濟まなかつた」と、親のお慈悲に歸らずには居られぬやうになるのである。

十七

石見の益田町の専光寺の木村師は、從來人に法を説いて、人が慈悲を間違はしてもする時は、蹴り仆した程のお方であるが、近頃は大變優しくなられ、人に厳しく言ふて、人が慈悲に氣附かるゝ時などはあとから手を取つて、「あゝわしが悪るかつた、こらへてお呉れ〜」と謝りてお出になる。此間も私が泣かされたのは、母の死ぬ時言はれた事今思ひ出すと腸に泌み渡るとして話された話である。夫は大晦日の晩であつて、母は正月の準備するとして莖蕪など切つて居られると思ふて見て居ると、急に自分の幼名を呼びて、お前の行く先きが氣にかゝると言はれる。自分は夫れを二こと三こと聞くと、腹の中が苦しくて絶えられ無くなり、何に御心配下

さるな、力の限り遣つて行きます、と強いて言ひは言ふたが夫れから三時間の後に母は急病で死なれて仕舞ふた。今夫れを思ひ出すと腸に泌み渡る」と語られた。私は之れをきいて泣かされた。

十八

今大悲の親様は、私の行く先きが氣にかゝる〜で長々の間御苦勞下されて居るのである。五劫永劫の御苦勞は面白半分にあるては無い、汝の地獄に墮ちるのが氣にかゝる〜で長々の御苦勞御修行があるのである。其の親様の私の爲め、氣にかゝる〜の御心配が長の間積り積つて、遂に正覺を成就し阿彌陀佛と現はれ下され、今に待ち受けて下さる事、既に十劫なのである。

十九

今度石見で、或る一人の老人が、私の話すのを、ろ〜泣いて聞いて居た、聞けば子供が狂ひて居るとの事であつた。親は狂ひの子供が可哀しくて仕方が無い。大悲の親様は、私がかゝる狂ひをする、夫れが可哀相で見居られぬ。狂ひは自分の狂ひである事を知らぬ爲め、よい氣で色々の眞似をするのぢやが、他人にすれば、之を見て笑つて居る。夫れを見て居る親のお心では、居ても起つても在るに在られぬ。夫れも此の心配がもとであらう、親は皆な一々知つて居る、其の爲め此のやうに親は待ち受けて居るのぢやぞ」と、私の狂ひの様を一々御覽下さる時、佛は、ちつとして居られぬのである。『涅槃經』には宣はく。

如來は一切の爲めに、常に慈父母と爲りたまふ。當に知る

べし、諸の衆生は、皆な是れ如來の子なり。世尊大慈悲、衆の爲めに苦行を修したまふこと、人の鬼魅に著せられて狂亂所爲多きが如し、と。

二十

今大悲の親様の見て下さるが、茲である。十方衆生は皆な狂ひぢや、狂ひが狂ひながら、煩惱に狂はされて自分の狂ひである事を知らぬのぢや。其の狂ひの様を御覽下されて、ごつとして居られず、夫れが可哀相ぢやと言つて下さるのが、佛の慈悲である。

二十一

殊に今度は狂ひに御縁が多かつた。私の國でも狂ひの親が狂ひの子供にお慈悲を聞かせ度いとて連れて来て、私は狂ひに話した。狂ひは分つたか分らぬか知らぬが、唯にこゝ笑つて居る、夫れを見て居る親の方が、あゝ大悲の親様は、私がこのやうに狂ひてあるのを見て下されて、夫れが可哀相ぢやと言つて下さるのでムリですかと、よゝとばかり泣いて喜んだ。狂ひに話して居るのに、聞く親の方が泣いて仕舞ふ。

二十二

狂ひにも色々ある、理屈を言つて居るのも狂ひぢや、自分は正しいと思ひ、人の事彼是れ言つて居る奴も狂ひぢや、狂ひの奴は、自分は正しい、間違はぬと思つて居るから、狂ひなのぢや。佛は十方の狂ひを御覽下されてごつとして居られぬ夫れ故五劫の御思惟が來、夫れ故五劫の御苦勞が現はれたのぢや。夫れだから五劫永劫が有難いのぢや。私が此の狂ひであるのが、哀れて見て居られぬ故、佛は御苦勞下されたのぢ

佛意測り難し、然りと雖竊に斯の心を推するに云々——『歎異鈔』で言へば、先程申した「佛かねて知し召して云々」の切言葉が茲になるのである。世人は之を、佛が本當に知し召し下されたと言かず、親鸞聖人が斯く言つて下されたのだ、と頂くから可かぬ。「佛かねて知し召して」は親鸞聖人の仰せらるゝに非ず、佛が知し召し下さるのである。夫れなればこそ、次の「他力の悲願云々」の言葉葉が出て來るのである。

二十五

故に茲でも、佛の本願は佛の事なれば我々には分らぬ、然りながら、其の廣大の本願を、愚禿の頂き心地より、頂き上げる時は云々と仰せ下されたのである。凡て親鸞聖人の教行信證は、聖人が直き／＼も頂き下された、其のあなたの御自督の上より、大悲の思召の程を明かに御誌し下されたのである。さればこそ、彌陀の直説とは申すのである。『信卷』序文の文に聖人は自ら、茲を宣はく、茲に愚禿釋の親鸞、諸佛如來の眞説に信順して、論家釋家の宗義を披閱す。廣く三經の光澤を蒙つて特に一心の華文を開く。且く疑問を至して遂に明證を出す。誠に佛恩の深重なるを念うて、人倫の弄言を耻ぢず云々。

二十六

續いて「……一切の群生海は無始より……眞實の心なし」——即ち今言ふ一切群生海は皆な狂ひである。無始曠劫來今日今時に至る迄、穢れ、虚偽、誦ひの心のみにて、清淨眞實の

や。

さてこの處が『教行信證』の中にお示し下されてある。『歎異鈔』にも示し下さる處と、無論同じ事なれども、『教行信證』は四角い文字でお示して下されてある故、誰も夫れ程に思ふて居られぬ。之から記す三心釋といふが即ち夫れである。

二十三

『信卷』にのたまはく、愚惡の衆生の爲めに、阿彌陀如來已に三心の願を發したまへり。云何が思念せんや。答、佛意測り難し、然りと雖も竊に斯の心を推するに、一切の群生海は、無始よりこのかた乃至今日今時に至るまで、穢惡汚染にして清淨の心無く、虚假誑偽にして眞實の心無し。是を以て如來一切苦惱の衆生海を悲憫して、不可思議兆載永劫に、菩薩の行を行じたまひし時、三業の修したまふ所、一念一刹那も清淨ならざること無く、眞心ならざること無し。如來清淨の眞心を以て、圓融無碍不可思議不可稱不可説の至徳を成就したまへり。如來の至心を以て諸有の一切煩惱惡業邪智の群生海に回旋したまへり。則ち是れ利他の眞心を彰す。故に疑蓋雜ふることも無し。斯の至心は則ち是れ至徳の尊號を其の體とする也。云々。

二十四

至心はまこと、信樂は信じ喜ぶ心、欲生は淨土に參り度いと思ふ心である。此の三心の願を、阿彌陀如來已に愚惡の衆生の爲めに發し給へり、如何が之を思念せんやとある。「答ふ

心などは毛ほども無い。其處で「是を以て如來一切苦惱の衆生海を悲憫し給ひて」である。此の「是を以て」の一言が實に有難い處である。若し一應佛より言はれて直ぐハイと頂ける位なら、佛の本願は入らぬのである。何程力みどれ程懸命になつても、逆も可かぬ私故、是を以て如來は大悲の胸を痛めて下されたのである。

二十七

「……不可思議兆載永劫に於て、菩薩の行を行じたまひし時……至徳の尊號を以て其の體とする也。」とどう如來は此の私が淺間しき計りに、至心のまことのまことの塊りを御成就下されたのである。夫れはまことならざる私を、飽迄見捨て給はぬまことなのである。之が至心のまことなのであります。

二十八

先達でも或る御方の御話に「人生人を信じて九十九迄信じ、疑ふ可きものは更に無い、が最後に若しや其の自分の信じてるのが間違つたら、とたつた一つの雲が懸ると今迄の九十九が皆な駄目になり何うも不安で仕様が無くなると。九十九迄人を信ずると言へば、大層自分が善くして居るやうであるが、たつた最後の一つで皆な碎けるは、實は今迄信じて居ると思つてるものが皆なウソなのである。矢張り自分が善く思はれ度い爲め、自家の都合の爲め信じて居るのである。其の爲め最後の一つが出て、全部が皆な碎けるのである。第一人間が九十九迄人にまことに仕て居るなど、思つてるのがまことと無いのである。」

二十九

すると或方の仰せらるゝには「人生は皆なまことて無い、唯佛丈けまことである」とすれば、其の佛をまことと思ふ心も人間の心故、矢張りまことて無いで無いか」と。人間は結局こゝになつて来るのである。斯く人間は自分の爲す事もまことて無ければ、佛をまことと思ふ心もまことて無い。其の斯くまことならざる人間を哀れみ、飽迄其の者にまことにし、私の氣の附く迄眞實にして下さるが佛の御まことなのである。即ち佛のまことは、私のまことならざる處が可哀いのである、まことなのである。之れが眞の御まことである。而して其のまことが南無阿彌陀佛である、五劫永劫の御苦勞も之れ一つなのである。

三十

今度石見では、磯に漁をなし、海草取りて日を暮せる、蒲鉾小屋の中の哀れなる人間が、皆な其の心淋しき胸中に、飽迄見捨て給はぬ佛の御まことなる事を頂いて南無阿彌陀佛々々々と聲揚げて喜んで呉れた。私は其の様見て、親鸞聖人が「我はこれ賀古の教信汰彌の定なり」と仰せられたのが思ひ出され、實に有難かつた。斯く一文不知の仕やうの無き貧しき人間が、如來の廣大の悲願を頂き、南無阿彌陀佛々々々々々と喜ばせて貰はれるやう御成就下されたが南無阿彌陀佛なのである。

三十一

又或一人は來て申すに「私はあなたのお通りになる道の側の蒲鉾に住む、十六人の子供を持つ貧しき者でムります。今日御座があると聞き、參つて聴聞して見ますと、私如き斯る者

「何うか歸つて呉れ」と、親に言はれてイヤ、親の家に歸るのては無い、親よりさう言はれた一念に、親の言葉が胸に届く時「あゝ親に是程迄に手を下げさせたのであつたか、是程迄に親は私の行く先きを案じての御親切であつたか」と、其一念には謝り果て、歸らざるを得ぬのである。此の一念が聞其名號、信心歡喜乃至一念なのであります。

三十三

さて次は信樂である。此の信樂が又手軽い事で私の心に頂かれのて無い。聖人はお示し下されて曰く、「信樂と言ふは則ち是れ、如來の満足大悲圓融無碍の信心海なり。是の故に疑蓋間難すること有ること無し。教に信樂と名く。即ち利他廻向の至心を以て、信樂の體とする也」。即ち如來は満足大悲圓融無碍、底の底迄此の私のが可哀いとお慈悲の塊でまします。其の廣大のお心より、一厘一毛の疑もなく飽迄私にまことにして下さる、其の遣る瀬無き如來の信樂が、私の心に届いて下された處で始めて頂かれるのである。

三十四

處が之が初めより頂かれるに非ず、「……然に無始よりこのかた、一切の群生海、無明海に流轉し、諸有輪に沈迷し、衆苦輪に繫縛せられて、清淨の信樂無く、法爾として眞實の信樂無し……」。能く我々は「信ぜられぬ、喜ばれぬ」とかこつのであるが、既に斯く聖人は、仰せ置いて下さるのである。「是を以て無上の功德値遇し難く、最勝の淨信獲得すること

の爲めに御苦勞下されたお慈悲と承はり、あゝ有難いと頂かせて貰ひました。が、どうしてムリませう」と、如何にも其の受けやうが綺麗であつた。が氣に掛つたから「如來のお慈悲は斯くのお慈悲と頂くのでは無いぞ、此方が斯く」と分つたり、思つたりして頂くのでは無いが、其の如き分らぬ者の爲めに、親様は御苦勞下されたのでは無いか。大悲の佛はお前が信ずると否とに係はらずお前の爲めに昔から御苦勞下されてあるぢや」と申すなり、「廣大のお慈悲は私にさう言ふて下さるお慈悲であつたか、初めて承はつて有難い、私は何たる仕合せであつたか、一寸參詣して斯る有難き事知らせて貰ひました」と喜び勇んで歸つて行つた。と頂いたのでは何もならぬ。其の何とも仕て見やう無きまことの者の爲に、可哀い御心配で、成り上つて下されたお姿が十劫正覺のお姿なのである。其の廣大のおまことが初めて私の身にしみ下され、此の私の爲に夫程御心配下されたのであつたかと頂かせ貰つた時、初めて彌と眞に仕て見やう無き事が知らせて貰へるのである。夫れが一念の信である。

三十二

能く講話など言はるゝ話に、越中に善六とか申す同行があつて、其息子が何か腹立て、河にはまつて死なうとした。善六が飛んで行つて追ひつき、貴様何をするかと呼び止める。と、死んで仕舞うと言つて中々聞か無い。止めれば止める程益々はまつて死なうとする。最後に仕やうが無くなり、其子供を引きかゝえて、親が手をつき「あゝわしが悪るかつた、どうかからえて歸つて呉れ」と頼んだといふ話である。

難し。一切の凡小一切時の中に、貪愛の心常に能く善心を汗し、瞋憎の心常に能く法財を燒く。急作急修して頭燃を炙ふが如くするも、衆て雜毒雜修の善と名く。亦虛假語偽の行と名く。眞實の業と名けざる也。此の虛假雜毒の善を以て、無量光明土に生ぜん欲するは此れ必ず不可也。何を以ての故に。正しく如來善薩の行を行じたまひし時、三業の所修乃至一念一刹那も疑蓋難ること無きに由つて也」。即ち信樂は私の信樂にあらず、如來の信樂である。如來が斯く、一念一刹那も疑はず隔てず、飽迄此の疑ひの私に善くして下さる、此の如來の遣る瀬無き信樂で、初めて私の胸の中に、「あゝ有難い」と頂かせて貰はれるのである。故に我々が一念「あゝ有難い」と頂く此の一念の信心は、即ち如來の信樂を頂くのである。之れが如來廻向の信樂である。故に次に、「……斯の心は即ち如來の大悲心なるが故に、必ず報土の正定の因と成る。如來苦惱の群生海を悲憐し給ひて、無碍廣大の淨信を以て、諸有海に回施したまへり。是を利他眞實の信心と名く。云云」。

三十五

殊に有難きは此の三心釋に於て、度々「疑蓋難ること無し」と繰返しお示し下されてある事である。佛は私に此の疑ひの心に閉され、其の爲め種々狂はされて居るを見て、夫れが不慍で仕様なく、其者に届ける爲め、身口意の三業一念一刹那も疑ひの心を難えず、飽迄私を信じ善くして居て下さるのである。此の遣る瀬無き佛の信樂まします爲め、遂に私の疑深き心に、夫程迄に信じ給はる佛の大悲なりしか、あゝ有難たや

と頂かせ貰へるのである。之を人生的に言へば、我々の信ずると言ふは、充分で無けれども信ずる、善く無いけれども信ずると、人を信ずると言へば善きに似たれども、結局は善くないけれども、と我慢して居るのである。處が佛は、私の其の善く無いのが哀れて見て居られぬと、飽迄其者に清淨にし飽迄其者に眞實にして下され、此の一點疑ひ難へぬ如來の御苦勞によつて、其の如來の満足大悲が私の心に貫はれるのである。之が一念の信心であります。

三十六

次に欲生は淨土に生れ度いと思ふ心である。我々は此の世に生き度いとこそ思へ、淨土に生れ度いなどの思ひは微塵も無い。近頃は生活問題が喧しくなり、此の間も或る新聞に、佛敎家など何をして居るのであるか、南無阿彌陀佛を稱へて腹ふくれた事あるかなど書いてあつた。處が佛は我々が、斯く此世に執着して日々淺間しき日暮しを續けてる、此の迷ひの有様を御覽下されて、夫れが可哀相であると、極樂無爲涅槃界を莊嚴し、理想的の國土を建設して、夫れへ生れ度いと思へと、佛の方より呼びかけて下さるのである。此れが此の欲生の心である。聖人は仰せられて宣はく、

「……欲生と言ふは、則是れ如來諸有の群生を招喚したまふの勅命なり。即ち眞實の信樂を以て、欲生の體と爲る也。」
即ち欲生は地獄にうろつき度き私を、飽迄我が國に生れんと思へと、呼び掛け給はる大悲の御親心にてまします。此の親心は、即ち如來の遣る瀬無き満足大悲のお心なれば、即ち信樂を以て其の體とする也である。

三十七

「……誠にはれ大小凡聖定散自力の回向に非ず、故に不回向と名る也。」
故に此の欲生心は私にて起るに非ず、如來御回向の頂き物なれば即ち不回向の心と言ふ。
然に微塵界の有情煩惱海に流轉し、生死海に漂没して

眞實の廻向心無し、清淨の廻向心無し……
然るに其の如來廻向の源を尋ねれば、即ち私が無始以來生死海に惑溺して、人に善く仕度いといふ廻向心も無ければ、往生を願ふ欲生心も全く絶え果て、ある。其の爲めに如來大悲の胸を痛め給はりたのである。而して此の者の爲に如來の御苦勞は如何に。

「……是の故に如來一切苦惱の群生海を砕き、菩薩の行を行じ給ひし時、三業の所修乃至一念一刹那も廻向心を首として、大悲心を成就することを得たまへるが故に、利他眞實の欲生心を以て諸有海に廻施したまへり。欲生は即ち是れ廻向心なり。斯れ則ち大悲心なるが故に、疑蓋難ること無し。云々。」

即ち私が斯る者あるか故に、此の者の爲めに如來が一々の行をして下された時、私があつた如き事して居るから、早く吾が親心を届けてやり度いと、一々の行皆な此の廻向心を首とし、御成就下されてやう度いと、而して此の廣大の廻向心を以て、早く淨土に生れんと欲へると、十劫以來呼び詰めにして、下さるのが、此の如來廻向の欲生心である。故に我々が此の廣大の御呼聲によつて、彌々慈悲に振り反つた一念に、願生彼國即得往生不退轉と、彼國に生れんと願ふ心が起るのである。而下された時、即ち往生である、ハイと頂けた一念に不退轉に住するるのである。

三十八

さて斯く順次頂き來る時は、要するに此の私の心中に淺間下されたのである。若し私の心に何も無いならば、如來は此の御苦勞はして下さらぬのである。さればこそ彌々此のお慈悲の根切れた一頭が下り、今迄の不足の思ひが消え、五分々々の根性が止み、煩惱の根切れて下されてのたまはく、
「……横超斷四流の言をお示し下されてのたまはく、
斷と言ふは往相の一心を發起するが故に、生として當に受くべきの生無く、趣としてまた到るべきの趣無し。已に六趣四生の因亡し果滅す。故に即ち頓に三有生死を斷絶す。趣の故に斷と言ふなり。」
故に即ち頓に三有生死を斷絶す。と。まことに廣大の大悲であります。南無阿彌陀佛。

近角常觀 著

懺悔錄 附録「歎異鈔」

第七版 定價二十錢 郵稅貳錢 袖珍美本

本書は著者が實驗の信味に基づき、從來求道者の金科玉條たる『歎異鈔』の眞髓、惡人救濟の眞意義を闡明せんが爲に編述したるものにして、著者は先づ自己の經驗に筆を起し、半歳以上胸中に鬱積して寸時も止まざりし煩悶の實狀と最後に佛陀攝取の慈光に接して人生の黒闇頓に一掃せる感謝の實感とを最も眞率精細に告白し、更に進みて之を王舎城の悲劇に照し、又著者が實驗を聞きて獄中大安慰を得給へる某氏の實例に見、人間何人と雖も如來慈光の下唯一救濟の一道ある所以を叮嚀懇切に詳述したり。蓋し是れ『懺悔錄』の名ある所以にして一讀入信の人少なからず

近角常觀師序 鈴木龍司 著

入信之經路

正價三十錢 郵稅四錢

著者は宗教家にあらず、僧侶にあらず、たゞ現代に生活し、現代の空氣に觸れ、而も、所謂近代人たるに甘んずることを得ざる一青年也。
然り而して、筆をその幼時の記憶より起し、中學にありては、儒教的理想と奮闘し無我愛を信じては、進むべきの行路を得、第一高等學校の三年を経過して、文科大學に學びては、所謂灰色の人生觀に満足すること能はずして、張合のなき日暮しをかこち、遂に一事に遭遇するや、今迄の修養的立場、主觀的立脚地にては、いかにするとも安住の地を見出すこと能はず、一切の思想を捨て直ちに走りて、絕對他力の恩寵に浴し、佛陀切々の慈愛に泣く状二十四年の心的經過と相待つて、一の飾りなく、有の儘に告白するもの即ち本書也。衷心止むに止まれぬ欲求を持して、暗黒の裡に彷徨する眞面目なる近代の青年の苦悶の跡萬人の肺腑を衝いて人をして、思はず佛陀の大懷に宿らざるを得ざらしむ。世の理想なきに苦しむもの、人生問題の歸趣を得ざるに悩むの士、是非一讀をす、む。

發行所 振替 東京 區 東 區 本 町 一 丁目 九 番 六 地 番 一 九 六 六 一 森 道 求 發行所 振替 東京 區 東 區 本 町 一 丁目 九 番 六 地 番 一 九 六 六 一 森 道 求 發行所

前號要目

求道

◎他力の悲願

講話

◎篤く三寶を敬せよ 近角常観

◎唯佛一道 同

告白

◎諸の衆生は如來の子也

川村貞治

◎私の苦む有様が可哀

ことの彌陀の仰 前本義和

雜錄

◎眞偽勘決 近角常観